

は示しているのである。

まとめ

ラッセルは、関係の存在論的地位を巡る新ヘーゲル主義との論争を通じて、「項」という包括的なカテゴリーに基づく实在論的で原子論的な存在論を形成した。この存在論の基本的特徴を与えるものとして、实在論的論理観、直接知覚説、論理の普遍性という三つのテーゼを挙げることができる。ラッセルはこうした存在論をもとに、『諸原理』において、数学を論理学に還元するという論理主義のプログラムを推進した。この存在論は非常に強力な实在論であるため、認識論にシワ寄せが来ざるをえないが、それは表示の理論が解決する。そして変項や命題関数といった論理学の基本的概念も表示概念であるとするだけで、論理的知識も説明される。だがこの表示概念には、そしてさらに命題やクラスといった論理体系に根本的な概念にはさまざまな困難があり、しかもそれは基本的な三つのテーゼに起因するため、論理主義のプログラムそのものを揺るがせるほど重大なものだったのである。

第2章 「不完全記号」の学説

前章で見たように、「項」を基本概念とする『諸原理』の形而上学は多くの困難を抱えていた。しかもそれは命題やクラス、量化といった彼の論理体系における根本的な概念に関わる問題であった。それらの困難の多くを解消し、彼の論理学、形而上学、そして論理主義のプロジェクトを大きく進展させたのが、1905年の論文「表示について」において初めて発表された、表示句の分析としての「記述理論 theory of description」であり、またそれを通じて得た洞察をさまざまな諸概念に適用して形成された「不完全記号 incomplete symbols」の学説である¹⁾。

2.1 記述理論

『諸原理』は、基本的に非常に素朴な原子論的かつ实在論的な意味論を有していた。単純な語は単純な項を指示し、それを意味とする。複数の語から形成された文は、語が指示する項からなる複合的な項、すなわち命題を指示し、それを意味とする。結果、その命題の主張内容が帰属される対象そのものが命題の

1) 記述理論はラッセル自身によっても、大きな知的ブレイクスルーの経験として語られている。たとえば MPD, p.49 (邦訳 81 頁) でも、「1905 年の記述理論がこうした困難 [引用者注: 関係づける関係と関係それ自身の区別などを指す] を一掃した」と述べられている。ただしこの書でのラッセルの回想は必ずしも額面通り受け取れない。たとえばここでラッセルは、マイノグの対象へのコミットを記述理論が解決した問題の一つに数えているが [ibid., p.64 (邦訳 107-8 頁)], それは表示概念の理論においてすでに解消されている。また新ヘーゲル主義に反旗を翻して以来、真理の対応説をとり続けていたと述べているが [ibid., p.130 (邦訳 224 頁)], 『諸原理』の真理論が対応説ではないことは前章で見たとおりである。

構成要素となる(いわゆる「ラッセル的命題」)。また、直接知覚説に基づき、語や文の意味を理解しているとは、その意味である項を直接意識していることであるとされた(「面識の原理」)。しかし、この意味論原則は、文が表示句を含む場合には適用できないと思われた。そこでラッセルは、『諸原理』では表示概念という存在者を導入することで対処した。つまり表示概念の理論は、意味論原則の例外と思われる事例に対し、別の存在者を意味として割り当てるという意味論的な対応をするものと言える。そしてこの表示概念に関して、それを項と認めることができないという困難が生じたのであった。

「表示について」においてラッセルは、変項と命題関数を原始的概念とし、「すべての人間は死すべきものである」という文を「すべての x について、 x は人間であるならば、 x は死すべきものである」と書き換える²⁾。あるいは「現在のフランス王ははげである」という the のケースならば、「 x は現在のフランス王であり、かつ x ははげであるようなそんな x が唯一つだけ存在する」と書き換えられる。このように書き換えられることにより、「すべての人間」や「現在のフランス王」という記述句が、「 x は人間である」や「 x は現在のフランス王である」のような開放文に対する量化という操作の適用として分析され、意味となる存在者を割り当てられるべき単一の文法的単位としては消去されている。つまり、これらの文の意味を説明するために使用しなければならないのは命題関数という存在者や量化という操作であって、〈すべての人間〉や〈現在のフランス王〉といった表示概念ではない。しかもこの量化の範囲は「 x は死すべきものである」や「 x ははげである」にまで及んでいるため、命題の中から「すべての人間」や「現在のフランス王」という表現に対応する部分だけを取り出してその意味とすることはできない。

すべてのもの *everything*、ないもの *nothing*、あるもの *something* は、単独では何ら意味を持つとは考えられず、それらを含む各命題に対して意味は割り当てられる。これこそ、私が支持したい表示の理論の原理である。表示句は決してそれ自身では意味を持たず、それを含む言語表現によって意味される各命題が意味を持つのである。[OD, p.416. (邦訳 49-50 頁)]

2) OD, p.417 (邦訳 49 頁) では「つねに真である always true」を原始的概念とし、普遍量化を含む命題を「もし x が人間であるならば、 x は死ぬ」はつねに真である」とする形で理論を提示している。

以上のような表示句を含む文の書き換えは、「プリンキピア・マテマティカ」の記号体系では次のように表記される。all のケースは

$$(x):\phi x.\supset.\psi x$$

であり、the のケースは

$$f\{(ix)(\phi x)\}.\equiv:(\exists c):\phi x.\equiv_x.x=c:f c$$

となる³⁾。the のケースにおいて注目すべきは、この表記法は、「 $(ix)(\phi x)$ 」という確定記述句を主語とし f を述語とする(あるいは $f(x)$ という命題関数に $(ix)(\phi x)$ という値が代入されている)かのように見える文が、実は「 ϕ であるような x の値は c 一つだけであり、かつその c は f である」という文を省略したものだということを明らかにする、という意図を持って採用されていることである。

このように記述理論に基づく量化・確定記述の分析によれば、記述句を含む文全体が、命題関数がある値によって充足されることを述べた文へと書き換えられるために、文が含む各語に原子論的かつ実在論的な意味論原則をそのまま適用したとしても、記述句に表示概念という特別な意味論的値を付与する必要がない。つまり、記述句を含む文全体は有意味であるが、記述句そのものを意味を付与されるべき表現単位として見なさないという形で、表示の問題に対して統語論的解決を与えるのである。記述句は一定の文に含まれる限りで有意味であり、そうした特定の文脈を離れては意味を与えない「不完全記号」なのである。

だが『諸原理』において、変項と命題関数は一種の表示概念であるとされていた。だとすれば、それらを原始的概念として前提する記述理論は、すべての表示概念を消去することに成功しているわけではなく、変項と命題関数という二種類の表示概念に切り詰めることができただけではないだろうか。そしてこれらに関しては、『諸原理』における表示概念と同様に、「グレイの悲歌」論法によって示された問題が残されているのではないか。実際、ラッセルは「表示について」の直前に書かれた「根本概念について」において初めて「グレイの悲歌」論法を提起し、その考察を通じて記述理論に到達したのだが[OF, pp.381-4],

3) 記述を示す記号は、実際は小文字のイオタの上下を逆にしたものであるが、本書では正立したイオタを用いることにする。

そこでは、記述理論で前提されている「すべてのもの *everything* や任意のもの *anything* は、35-39 [「根本概念について」の節番号。ここで「グレイの悲歌」論法が提起される] で考察したすべての困難を含む表示概念」であり、その論法によって示された「反論は、*the* に関してそうであったように、ここでも致命的である。そこで他の何らかの理論を見つけだした方がよい」と認めている [*ibid.*, pp.385-6]。

命題関数が一種の表示概念になるのは、それが変項を含むからである。だとすれば、記述理論は「グレイの悲歌」の考察によって示された問題を、表示句の意味一般の問題ではなく変項という唯一の表示概念に切り詰めたといえることができる。事実、ラッセル自身が「根本概念について」でそう認めている。

興味深くかつ奇妙な点は、我々が実際にしてきたように表示を切り詰めていくことによって、それらはすべて、議論の出発点となった *any* という唯一の概念に還元されたことである。この一つの概念はつねに前提されるように、またその他の表示概念を拒否せざるをえなくしたすべての困難を自身の内に含んでいるように思われる。よって我々には、表示を使うことなく新たに *any* の十全な理論を作り出すという課題が残されているのである。……そして *any* 自身は一般に根本的ではなく、*anything* という形式においてのみ根本的なのである。

Anything は変項 *the variable* とまさに同一のものであると思われる。
[*ibid.*, p.387.]

記述理論がこうした問題を残していることは、『諸原理』のラッセルの立場を理解していた人物にとっては明らかであった。たとえばムーアは1905年10月23日に、ラッセルにあてた書簡で次のように述べている。

「マインド」の君の論文には非常にひきつけられたし、最後にはその主な諸結論（私がそれを理解しているとすれば、の話だが）受け入れもしたが、初めはそのうちの一つに強く反発を感じた。まず、次のことを説明してほしい。君は「我々が把握している命題の構成要素は、いずれも我々が直接面識している存在者である」と言うが、すると私たちは変項もまた直接面識しているのだろうか。だとすればそれはいかなる種類の存在者なのだろうか。

[CP4, p.xxxv.]

このムーアの、『諸原理』のラッセルの見解を知るものとしては当然の問いかけに対し、ラッセルは次のように答えている。

表示に関する論文での私の主要な結論に同意してくれてうれしい。変項に関する君の疑問が、変項に関するその他のすべてと同様に、困惑させるものであることは認めよう。私は普段は、我々は変項を直接面識しているが、変項は存在者ではないと考える傾向にある。だがときには、それは一つの、ただし不確定な存在者であるとも考えることもある。前者の見解では、変項自身に関して意味と表示対象の問題が残ることになり、私は表示の問題を変項の問題へと切り詰めたに過ぎないと言えるだろう。後者は恐ろしいほど困難な見解で、私がこれまで思いついたすべての見解と同様に、強力な批判にあうと思われる。[*ibid.*, p.xxxv.]

以上の応答に明らかなように、「表示について」を執筆した時期にも、ラッセルは一種の表示概念として変項を理解し、それに対して「意味と表示対象の問題」、つまり「グレイの悲歌」の議論の困難が生じることを自覚していたのだが、解決策を手にはしていなかったのである。

こうした状況は『プリンキピア』でも変わっていないと思われる。『諸原理』では一貫してラッセルは記号ではなくその意味を考察の対象としており、そしてそれは「表示について」や『プリンキピア』以降でも同様である。しかし不完全記号の学説は記述句や文といった記号の水準を議論に織り込むものであり、その結果、ラッセルの論述は記号について論じているのか、それともその意味について論じているのか、テキストの文面からは見てとりにくくなっている（この点に関しては25で論じることにする）。そこで、『プリンキピア』での変項や命題関数はもはや表示概念ではなく記号であると解釈する余地も生まれてくる⁴⁾。しかし私見によれば、ラッセルは『プリンキピア』や『知識の理論』でも、変

4) Landini (1998), pp.275-9 を参照。ランディニは、PoM から記述理論と置き換え理論を経て PM へと至る、ラッセルの議論の展開に関する独自の解釈に基づき、PM の個体変項は真の変項であるが、関数変項や命題変項は実は変項ではなく述語や文に関する図式文字であるとし、唯名論的解釈をとる。また個体変項も、表示概念という形で物化してはいないと解釈する。

項や命題関数を表示概念であるとしており、表示概念の問題は未解決であった。

たとえば『プリンキピア』では、変項は「その表示対象 denotation に関して曖昧さがあり、したがって不確定的である」[PM, p.4 (邦訳 28 頁)] と、また命題関数は「 x を特定せずに ϕx について語るとき、我々はその関数の一つの値を意味しているが、特定の一つを意味しているわけではない。このことを、「 ϕx は ϕa 、 ϕb 、 ϕc など（ここで ϕa 、 ϕb 、 ϕc は ϕx のさまざまな値である）を不確定に表示すると表現することにしよう」[*ibid.*, p.39 (邦訳 134 頁)] とされているように、ラッセルは『諸原理』と同じく〈any〉を含む表示概念による不確定な表示関係によって、変項や命題関数の論理的機能を説明しようとしていると思われる。

また 1911 年の「面識による知識と記述による知識」では、次のように言われている。

……「『ウェイヴァリー』の著者」に関する任意の命題中には、スコットが明示的に言及されていないかぎり、表示対象そのもの、すなわちスコットは生じておらず、表示対象についての概念のみが生じている。この概念は変項によって表現されている。……我々が語っているのは、『ウェイヴァリー』の著者であり、『マーミオン』の著者である一人の男がいること、つまりある一人の人が『ウェイヴァリー』と『マーミオン』を書いたのであり、他の誰もそうしなかったということである。したがって、同一性は一つの変項についての同一性、すなわち不確定な主語「ある一人の人」についてのものなのである。[KAKD, p.159. (邦訳 214-5 頁)]

ここでは、まず前半では、文や語のような記号ではなく、それが意味する命題や概念が考慮されていること、そして変項記号もまたそうした概念的要素を表現していることが明らかにされ、後半部分において、その概念的要素としての「不確定な主語」と『ウェイヴァリー』の著者との同一性が記述命題において問題になっているのだと主張されているように思われる。変項であれ定項であれ、記号と『ウェイヴァリー』の著者との関係を同一性と見なすことができなため、以上の引用文はこのように解釈すべきであり、『プリンキピア』執筆後も、記号によって意味される概念としての変項の存在を認めていると理解すべきだと思われる。

もちろん記述理論によって表示という関係が、表示概念からではなく変項記

号や開放文などの記号から表示対象へと向かうものとされるようになったのだとすれば、『プリンキピア』からの引用中の「変項」や「命題関数」は純粹に統語論的对象であって、表示概念ではないと解釈することも可能であろう。あるいは「面識による知識と記述による知識」からの引用にも、記号としての変項への言及が含まれていることも確かであり、ここから私とは逆に、変項を統語論的存在として一貫した解釈を下すことも可能かもしれない。しかし、変項記号や開放文そのものが、諸対象に対して「不確定的な表示」という論理的関係を持つとすることは不可能だと思われる。そうした論理的関係を成り立たせるのは、記号自体ではなく我々によるその理解であろう。そしてこの理解を、あるいは無限に多くの対象への表示という関係を説明するために、ラッセルは表示概念という存在者を指定したのであった。それゆえ、仮に『プリンキピア』の変項や命題関数が純粹に統語論的对象であったとしても、それは表示概念の問題が解決されたことを意味しない。

あるいは、もしそれがラッセル解釈として正しいとするのなら、ラッセルは表示概念に訴えるのではなく、他のなんらかの仕方でも無限に多くの対象に対する論理的関係を説明しているはずである。しかし、この時期のラッセルのテキストにそうした説明を与える箇所は見当たらない。それどころか、『知識の理論』などでの、変項を構成要素とする「論理形式」という対象の導入とその存在論的身分に対する困惑、そしてウイトゲンシュタインの批判によるその放棄というその後の思考の足取りは、ラッセルが変項やそれを含む命題関数を、単に統語論的な存在ではなく、記号によって意味される対象として扱っていることを示している。それゆえ我々としては、記述理論は表示概念に関わる問題を完全に解決したのではなく、その問題を変項と命題関数という種類の表示概念に切り詰めたにすぎないのだと解釈することにした。

このように記述理論は表示の問題に対する完全な解答ではなかった。しかし、やはりこれを通じて得た「不完全記号」というアイデア、つまり文の文法形式とその意味である命題の論理形式が乖離し、文に単一の文法的単位として含まれている記号に対して、必ずしも単一の存在者を意味として割り当てることができないという洞察は、ラッセルに多くの実り多い理論をもたらし、前章で取り上げたその他の困難を解決することを可能にしたのである。

2.2 無クラス理論とタイプ理論

ラッセルはクラスと命題関数に関するパラドクスが発生する原因を、「悪循環原理」への違反にあるとした。すなわち、「ある集まりのすべて [の要素] を含むものはなんであれ、その集まりの中の一つではありえない」あるいは逆に言えば、「ある集まりが、一つの全体を成すとするとその全体によってのみ定義可能な要素を持つことになる時、その集まりは「全体を成さない」という原理⁵⁾」である。たとえばクラスのパラドクスの場合、「x は自身を要素としないすべてのクラスである」という条件を充たすクラスのすべてを含むとされたクラスについて、そのクラス自体がこの条件に当てはまるかどうか、つまりそのクラス自身の要素であるかどうかを問うことにより、パラドクスが生じると考えられる。命題関数についても同様の自己言及的事態が生じており、「不当な全体 illegitimate totalities」が形成されようとしているために、パラドクスが生じるとされるのである。

だが悪循環原理そのものは、パラドクスの原因を指摘し、不当な量化を禁じるという消極的な役割を果たしているにすぎない。クラスや命題関数といった、パラドクスに関わる対象を分析し、その本性に即してなぜ悪循環原理への違反が問題になるのかを明らかにする、積極的な理論が必要であろう [ISSL, p.205]。クラスに関するそうした理論としてラッセルが開発したのが「無クラス理論 no class theory」であるが⁶⁾、これは記述理論を通じて得た「不完全記号」という考えをクラスに適用したものである。すなわち、ある種の対象すべてについて語る文が表現する全称命題は、その種のすべての対象を表示するクラス表示概念を含むように見えるが、その文が表現する命題は実はクラス表示概念を構成要素としていないとするのである。それゆえ、そうした文を有意味と認めることは、その文が語っている対象であると思われるクラスや、そのクラスを表示する表示概念を必要としない。そして文の統語論的規則、あるいは文が表現する命題の形成規則により、自己言及的な命題の形成を防止する。つまり、原

5) PM, p.37. (邦訳 130 頁) MLTT, p.63 でもまったく同じ文で悪循環原理が述べられている。
6) パラドクスの解決法としては、無クラス理論以外にも、クラスの大きさを制限する方法や、ジグザグ理論などさまざまな理論をラッセルは検討していたが、ここでは論じない (ラッセル自身が SDTTN でこれらの試みを概略的に述べている)。

子命題から全称命題を形成するための規則が、悪循環原理を実現する積極的な理論となるのである。そのため「無クラス理論」においては、クラスに関しても、クラスについて語るときに利用される命題関数に関しても、パラドクスは発生しない。しかもその名の通り、そもそもクラスを対象としないため、単位クラスや空クラスにまつわる問題も生じることがない。

だが、実はラッセルが「無クラス理論」と呼んだ理論には二つある。一般に知られているのは、命題関数を原始的概念とし、クラスについて語るように見える命題を命題関数について語る命題へと書き換える「分岐タイプ理論 ramified type theory」である。しかしそれに時期的に先行する、もう一つの無クラス理論が存在したのである。それは、命題関数ではなく命題と個体だけを原始概念と認め、クラスについて語るように見える命題を、そのいずれかについて語る命題へと書き換えることを目指す、「置き換え理論 substitutional theory」である⁷⁾。

置き換え理論は、命題と個体のみを実在する存在者として認め、ある命題の構成要素である個体を別の個体によって置き換えるという操作を通じて、より複雑な命題の形成を説明する。置き換え理論においては、有意味と認められる表現は、実在する命題と個体のそれぞれを表現する記号と、ある命題からその一部を取り去り別の個体に置き換えて新たな命題を形成するという、一連の置き換え操作が完了したことを述べる文のみである。置き換え理論の基本的戦略は、この一連の置き換え操作が完了したことを述べる文が含む一部の記号列、すなわち「ある命題からその要素である個体を取り去る」という手続きを表現する部分を、命題関数ないしクラスを意味する記号と見なしうようにその統語論的規則を定める、というものである。この記号列は、命題あるいは個体という実在する対象を意味するものでもなければ、完了した置き換え操作を述べる文でもないため、それ自体としては単独で何らかの意味を持つものではない。「完了した置き換え操作」というより広い文脈に含まれる限りにおいて有意味であるにすぎない。しかしその文全体は、クラスや命題関数について述べる文

7) 置き換え理論に関しては、Hylton (1980)、Landini (1998, 2003)、Stevens (2005)、戸田山 (2007) を参照。中でも、特にランディニの著書は置き換え理論だけでなく、(普遍と命題関数の区別などの論点に関する) その前後の見解についての研究としても大きな意義を持つものである。しかし「プリンキピア」の論理体系の唯名論的解釈などに関しては大いに疑問であり、2.1 で述べたように、「プリンキピア」でも表示概念としての変項や命題関数としてその実在性を認められていると解釈すべきであると思われる。

であるかのように読みうる文法形式を持ち、それゆえクラスや命題関数についての命題を表現するものと見なすことができる。

ラッセルは、まず以上のような仕方では「不完全記号」のアイデアをクラスの理論に適用しようとしたのである。置き換え理論において実在するとされる対象は命題と個体のみであり、命題もまた個体の一種であるため、どちらも個体変項の値となる対象であるとされる。それゆえ置き換え理論における変項は無制限であり、論理の普遍性のテーゼに違反せず、実在にタイプの区別を持ち込むことなくパラドクスを解決することができる。

しかし置き換え理論は、「あるクラスの要素であるすべての命題が真である」ことを語る全称命題に関して生じるパラドクスを解決できないという問題があった⁸⁾。この問題に対し、ラッセルは置き換え理論を修正し一般命題は実在しないとすることで解決しようとしたが [ISSL]、しかしこの修正を経てもなお置き換え理論には問題が認められた。そこでラッセルは置き換え理論による解決を断念し、もう一つの無クラス理論、すなわちタイプ理論へと向かうことになったのである。

タイプ理論

タイプ理論は、個体と命題だけでなく命題関数も原始概念とし、命題と命題関数にタイプの階層を認めることにより、パラドクスの発生を防ぐ方法である。個体をタイプ0とすると、個体の領域が確定していることを前提する対象がタイプ1の対象になる。個体のみを構成要素とする命題はタイプ1の命題であり、また個体を変項の値とする命題関数はタイプ1の命題関数である。そしてタイプ1の命題について語る命題はタイプ2の命題、タイプ1の命題関数を変項の値とする命題関数はタイプ2とし、以下同様にして命題と命題関数の階層が形成される。そして n 階の命題または命題関数が有意味であるためには、それが言及する範囲（有意味性の範囲）、すなわち言及される（もしくは変項の値となる） $n-1$ 階の命題もしくは命題関数のクラスがまず確定されなければならない。そのため、自身について語ろうとする文は命題を表現せず無意味であり、また自身を変項の値とする命題関数を用いた一般的な文もまた有意味な命題ではありえない。

8) 「 P_0/a_0 のパラドクス」と呼ばれる問題である。Landini (1989) を参照。

だが、論理の普遍性のテーゼを保持しているラッセルにとっては、こうしたタイプの階層を実在する対象間に成立する秩序とすることを回避しなければならない。そのためラッセルは、命題と命題関数の階層は我々の思考や判断から独立に実在する対象間に成立しているものではなく、原子命題からその要素である個体を変項に置き換えて命題関数を形成し、さらにその変項を量化して一般命題を形成するという手続きを通じて、我々が段階を追って構成していく対象の間に成立する秩序であるとしたのである⁹⁾。我々による構成に依存する対象間の区別であるため、タイプの階層は実在の対象間の区別ではないことになる。このようなタイプ理論の構成主義的側面は、実際の構成方法の説明も含め、次章で取り上げることにする。

クラス名を含む文は、命題関数に言及する文に書き換えられるため、クラス名の意味としてクラス表示概念やクラスが存在するとする必要はなく、それゆえクラス表示概念に関する「グレイの悲歌」の問題やクラスに関するパラドクスが発生することはない。そもそも実在する対象とされないため、クラス表示概念についても、その表示対象であるクラスについても何も問題は生じないのである。またパラドクスはクラスだけでなく命題関数についても生じていたが、それもまた命題関数間のタイプの区別によって解消されている。

しかしラッセルが論じているパラドクスのすべてが、タイプの区別によって解決されるわけではない。いわゆる「嘘つき」のパラドクス¹⁰⁾や、「19より少ない音節では名付けられない数」についてのペリーのパラドクス、あるいはリシャールのパラドクスなど、後年「意味論的パラドクス」としてクラスや命題関数についての上述の「論理的パラドクス」とは区別されるべきとされた問題

9) たとえばPMでは次のように述べられている。「……任意の割り当てられた命題について、それが*1の原始命題に類比的な[規則]に従うことを我々は証明できるのだが、しかしそれは一段階ずつ順を追って初めて証明できるのである。……高階には順を追ってしか到達できないという事実は本質的である。なぜなら、そうでないかぎり、我々は異なるタイプを股にかける見かけの変項を必要とすることになるのだが、そうするとタイプの基となる原理にそむくことになるからである。」[PM, p.130] また *ibid.*, p.133にも、より高いタイプを「一歩一歩定義する」ことへの言及がある。

10) 「嘘つきのパラドクス」の例として有名なものとして、「クレタ人であるエビメニダスが「すべてのクレタ人は嘘つきである」と言うとき、その発言自体は嘘か本当か」という問題が挙げられることがあるが、この事例はそのままでは何らパラドクスではない。なぜならその発言を嘘であると考えたとき、そこから帰結するのは「クレタ人の中には正直な人間もいる」ということであって、このエビメニダスの発言を真と考える必要は出てこないからである。

である¹¹⁾。これらのパラドクスを解決するためには、同じタイプの命題関数間に何らかの階層の違いを認める必要がある¹²⁾。このような一つのタイプの命題関数の間で区別されるべき階層を、ラッセルは「オーダー order」と呼んだ。オーダーの違いについて、ラッセル自身が挙げている有名な例¹³⁾を手がかりに、具体的に見ておこう。〈ナポレオンは、偉大な将軍が持っているすべての性質を備えていた〉という命題における、〈x は偉大な将軍が持っているすべての性質を備えていた〉という命題関数は、〈ナポレオン〉や〈徳川家康〉などの個体を変項の値とするので、タイプ1の命題関数である。しかしこの命題関数が有意味であるためには、「偉大な将軍が持っているすべての性質」という量化表現によって言及されている命題関数の範囲、すなわち〈x は勇敢である〉や〈x は危機に際してなお冷静である〉など、偉大な将軍の誰もが持っている人格の特徴を表す命題関数の範囲が、前もって定まっていなければならない。それらの命題関数もまた個体を変項の値とするタイプ1の命題関数であるが、しかし〈x は偉大な将軍が持っているすべての性質を備えていた〉よりもオーダーが一つ下になる。そして、たとえば〈ナポレオンは勇敢である〉が原子命題であり、実際に一切の量化を含んでいないとすると、〈x は勇敢である〉はタイプ1の命題関数の中でもっともオーダーが下の命題関数であることになる。つまりそれはタイプ1オーダー1の命題関数である。また〈x は偉大な将軍が持っているすべての性質を備えていた〉は、タイプ1でオーダー2の命題関数であると言えるだろう。ラッセルは、任意のタイプの命題関数のうち、もっともオーダーが下の命題関数のことを「述語的関数」と呼び、関数記号と変項記号の間に「!」

11) ラッセルが分岐タイプ理論を採用したことに関して、ラムジーらからの批判に回答するため、たとえばGoldfarb (1989) は、PMでラッセルはクラスと命題関数を実在物とする非構成主義的立場を支持していると解釈し、命題関数の誤用から意味論的パラドクスが生じるのだから、それを論理的パラドクスと同様に論理学が解決すべき課題とすることは正しいと論じている。しかし命題関数とクラスに関して、ラッセルは構成主義者と解釈すべきであり、この回答は無理筋であると思われる。これに対してLandini (1998) は、置き換え理論にとっての問題であった統語論的パラドクスである「Po/aoのパラドクス」を解決するためであると解釈し、それらを一括して扱うラッセルの方針を擁護している。

12) たとえばStevens (2005), p.36では、「エビメニデス以外のすべてのクレタ人のすべての発言もまた嘘である」という仮定を付け加えることにより、エビメニデスの事例を真正のパラドクスとし、タイプの制約を守りながら実際に矛盾が導出されている。またベリーのパラドクスが、同一タイプの命題関数間でのオーダーの区別を必要とすることについては、PMの訳者解説318-20頁を参照せよ。

13) PM, p.56 (邦訳183-4頁)、及びIMP, p.189 (邦訳249頁)を参照。

を挿入することで表現した。

述語的関数の概念に到達してようやく、「分岐タイプ理論」におけるクラスに関する文を命題関数に関する文に書き換える具体的な手続きを我々は理解することができる。

『プリンキピア』の表記法では、その書き換え方法は次の定義によって与えられる¹⁴⁾。

$$f!z(\phi z) = \exists(\psi) \{(\phi x \equiv \psi!x) \wedge f(\psi!x)\}$$

この定義の被定義項である左辺は、命題関数 ϕx によって規定されるクラス $z(\phi z)$ が、 $f(x)$ という関数を充足していると語っているかのように読めるよう配慮して書かれている。そしてこの定義の定義項である右辺には、クラスを指す名前に当たる表現が消え、命題関数を意味する述語のみが登場している。つまりこの定義は、あるクラスが一定のある性質を持つと主張しているように見える文を、そのクラスを規定する命題関数と同値の述語的関数が存在し、かつその述語的関数がその性質を持つということを主張する文に書き換える手続きを与えるものである。ラッセルはこのように、クラス名を単独で取り上げ定義することによってその意味を定めるのではなく、クラス名を含む文全体がいかにして意味を持つかを定めるという手法をとる。これは記述理論の場合と同様、文という統語論的存在のレベルで分析を行い、クラス名を「不完全記号」として意味論的値を付与すべき表現ではないとすることにより、名前として認めるべき表現に対しては実在論的意味論を維持しつつ、クラスにまつわる問題を回避していると言える。

『諸原理』において認められていたが「無クラス理論」によって消去されることになった対象には、二つの異なるものがあることに注意しなければならない。『諸原理』においては、我々が「クラス名」と呼ぶことにした'all'を含む表示句が、我々が「クラス表示概念」と呼んでいる〈all〉を含む表示概念を(心理的に)意味し、そしてクラス表示概念がその表示の対象であるクラスを表示する(論理的に意味する)とされていたが、無クラス理論はクラス表示概念とクラスの双方を消去するものである。すなわち、クラス表示概念は、記述理論における表示概念と同様に、それを含むように見える命題は実は命題関数とそれに対す

14) PM, p.76 (邦訳247頁)。

る量化という操作を含む命題であるとするにより、消去される。そしてそれによって、同時にクラスが、この命題を真にする変項の値があるときにその命題関数を充足する諸個体へと解消されるのである。また、クラスとは変項を一つしか持たない命題関数の外延であるが、ラッセルは複数の変項を持つ命題関数の外延、すなわち外延としての関係や、そのような命題関数が一定の論理的性質を持つときに成立する系列 series も同様に処理し、それらを意味するかに見える表現を不完全記号であるとする。不完全記号があたかも外延として持つかのように見える対象をラッセルは「論理的虚構 logical fiction」と呼ぶ。

クラスが論理的虚構とされることによって、『諸原理』ではクラスに対して生じていたさまざまな問題が回避される。『諸原理』では、命題の論理的主語になりうるすべての存在者が項であり個体であるとされていたが、クラスはそれについて語る事が可能な対象であるにもかかわらず、複数性を持つため項と見なせないことが問題となっていた。しかし無クラス理論では、そもそもクラスについて語る命題は存在せず、そのように見える命題は実は命題関数(述語的関数)について語るものとなる。それゆえ、クラスという例外的対象を認める必要がなく、項の存在論を一貫させることが可能となる。また、個体の存在は認められるが、個体を要素とするクラスやそうしたクラスのクラスなど、それ以上のタイプに属する対象の存在を認める必要がない体系になっているため、論理の普遍性のテーゼを放棄することなくパラドクスが回避されている¹⁵⁾。またパラドクスは命題関数についても生じるが、命題関数にもタイプの区別を認めることでこれもまた解決できる。だが記述理論と同じく、無クラス理論もタイプ理論も命題と命題関数という存在を原始的概念としている。それゆえ、これらの対象を分析し、それを表現する記号が不完全記号であることが示されない限り、命題の統一性や表示概念に関する困難はやはり解決されないまま残ることになる。

15) このほか、空クラスや単位クラスをめぐる問題も回避可能となる。PoMではクラスという対象が認められているにもかかわらず、空クラスだけが存在しないとされ、存在するのは空クラス概念だけという恣意的な対処が採られていた。これに対しPMでは、むしろそうした空クラスについての対処を他のクラス一般にも成り立つものとする事で、空クラスだけを例外として扱うという恣意性が回避されている。

またPoMではクラスとその要素は異なる対象とされていたが、単位クラスだけはその要素と同一であるとされていた。しかしPMでは、クラス一般が論理的虚構とされることで、単位クラスであるか否かを問わず、クラスがその要素と同一かどうかという問題は生じることがない。

2.3 多項関係理論

1906年から1912年まで

命題を表現する文を不完全記号とし、命題という対象を消去するためにラッセルが提示するのが、「判断の多項関係理論 multiple relation theory of judgement」である。この理論は記述理論や無クラス理論よりも成立が遅く、初めてまとまった形で発表されたのは1910年の『哲学論文集』の末尾に収められた「真理と虚偽の本性について」である。そして『プリンキピア』や『哲学入門』で同様の見解が論じられたあと、未発表に終わった『知識の理論』において「論理形式」という概念が導入され、精緻に理論化されることになる。

实在論的論理観を保持していたラッセルは、論理が考察の対象とする命題が(真偽を問わず)客観的に実在すると考えていたが、それには二つの問題があった。まず、複数の項からなる複合的な項としての命題の統一性をいかに説明するか、言い換えれば、命題に統一性をもたらすとされる関係づける関係と関係それ自身の違いを、項の存在論と整合的にどのように説明するかという問題である。次に、仮に命題の統一性が説明できたとしても、同じ説明を偽の命題に与えることができないのではないか、という問題があった。この二つのうち、偽の命題についての考察が突破口となった¹⁶⁾。

その萌芽は、1906年の「真理の本性について」に見られる。この論文でラッセルは、新ヘーゲル主義の斉合説的真理論を批判し、命題は観念からなり実在との対応によって真になるという対応説と、『諸原理』流の命題の实在論を比較検討している。この論文では、前章で言及した1905年の「真理の本性」に比べて対応説の評価がかなり上がっているのがうかがえる。だが、命題の实在論と違い、対応説は偽の事実を必要としないと思われているが、〈地球が太陽の周りを回るか、そうでないかのいずれかである〉という命題が真であることから選言的事実が存在することになるため、対応説でも〈地球は太陽の周りを回らない〉という「客観的虚偽 objective falsehood」が必要となるという議論により、命題の实在論を支持している [ONT, p.48]。

16) ラッセルはTK, p.109で、命題を不完全記号とする理由として、「真なる命題は認めうるが、偽の命題は認めることは困難である」ことを挙げている。

そしてこの議論に対するコメントとして、注目すべき発言がなされる。

この議論〔客観的な偽を認めるべきとする議論〕が拒否されるべきなのであれば、そのための根拠としうるのは、ただ次のようにすることだけである。すなわち、ある事実〔信念という事実〕が与えられたとき、それをつねに妥当な仕方、関係づけられた複数の従属的複合物に分析できるとはかぎらない、とすることである。たとえそうした分析が可能に見えたとしても、である。分析を妥当に行うには、従属的な複合物が事実である場合を除けば、いかなる見かけ上の従属的な複合物であれ、それをその構成要素へと解体すべきなのだ、我々はこう強く主張しなければならないのである。なぜなら事実である以外のすべての場合では、言語が一見示唆するそうした従属的な複合物は存在しないからである。〔*ibid.*, p.48.〕

そして「従属的な複合物が事実である場合を除いて」の箇所に、次の註が付されている。

これは私が論文「表示について」(『マインド』1905年10月)で採用した原則を拡張して適用したものである。そこでは「フランス王ははげである」のような命題が「フランス王」という句に対応する構成要素を含んでいないということを指摘した。〔*ibid.*, p.48.〕

「言語が一見示唆する……存在しないからである」という発言と「表示について」への指示から明らかなように、ここでラッセルは客観的な偽を表現する文を不完全記号と見なすという方法を示唆しているのである。つまりここでラッセルは、信念内容が真である場合は、信念を事実との二項関係とすることで直接知覚説と实在論的論理観を保持し、偽である場合はその内容を構成要素単位まで解体することにより、客観的な偽を消去しようと考えている。だが、こうした信念の選言的分析とも言うべき説が支持可能かどうかは怪しく、またこの段階ではあくまでアイデアにすぎず、具体的に展開されていない。

ラッセルは1910年に、この「真理の本姓について」を『哲学論集』に収録するにあたって、「一元論的真理論」と改題し、これまで引用してきた箇所を含む第三部は削除している。そして代わりに「真理と虚偽の本姓について」という

論文を新たに書き下ろし、同書の最終章とした。この1910年の論文で、ラッセルは不完全記号の学説を命題一般に適用し¹⁷⁾、同年の『プリンキピア・マテマティカ』第1巻、そして1912年の『哲学入門』においても同じ命題論が発表されている。それが「判断の多項関係理論」である。

多項関係理論の根本的なアイデアは、ある命題内容の判断を下す、あるいは信念を持つという心的状態¹⁸⁾を、『諸原理』のように判断主体と命題の間の二項関係とするのではなく、命題の各構成要素と主体の間の多項関係と見なすというものである。たとえばラッセルが「ソクラテスはプラトンを愛する」と信じたとする。『諸原理』においては〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という複合的項としての命題が存在し、この命題に対してラッセルは〈信じる〉という関係を持つとされていた。この見解が信念一般に適用されたため、信念が偽である場合にもその内容である命題の存在が要請されたのであった。しかし多項関係理論では、判断主体であるラッセルはまず、〈ソクラテス〉、〈愛する〉、〈プラトン〉という実在する対象をそれぞれ独立に面識し、つぎに〈判断する〉という心的な働きを行使することにより、以上のような対象と自己自身を一つにまとめ上げるとされる。つまり、一定の内容の判断を下すという心的事実は、

〈判断する(ラッセル, ソクラテス, 愛する, プラトン)〉

という構造を持つ複合物であることになる。このとき〈判断する〉は〈ラッセル〉という人物を、〈ソクラテス〉、〈愛する〉、〈プラトン〉という三つのものと関係づける四項関係であって、

〈ラッセル-判断する-〈ソクラテスはプラトンを愛する〉〉

のように、主体と一つの複合物を関係づける二項関係ではない。

17) 偽の命題から命題一般へと不完全記号の学説の適用範囲が広げられた理由は、この時期のラッセルの草稿がまだ刊行されていないので、不明とせざるをえない。一つの理由として考えるのは、1907年にパラドクス回避の方法として、置き換え理論を最終的に破棄しタイプ理論を採用するに至ったことである。タイプ理論では命題関数だけでなく命題の間にもタイプの違いを認めることになるが、命題が実在物だとすればこれは、実在に区別を持ち込むことを意味し、論理の普遍性のテーゼに抵触する。だが命題を意味する文を一般に不完全記号だとするならば、命題の間のタイプの違いを実際に持ち込まずに済む。しかしこれには文献的証拠はなく、推測の範囲を出るものではない。

18) ラッセルは「判断」という語を用いるが、命題態度に関する現在の議論では主に「信念」という語が用いられている。本書では、「判断」と「信念」を同義とし互換的に使用する。

しかし、自分の信じている事柄を表明する場合、我々はそう信じている主体が自分自身であることや、その事柄に対する自分の態度についてわざわざ言及しない。「ソクラテスはプラトンを愛すると私は信じている」ではなく、端的に「ソクラテスはプラトンを愛する」と発話する。こうした言語行為に関わる慣習のために、多項関係の事実である信念から、信念の内容である〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という命題が抽象され¹⁹⁾、「ソクラテスはプラトンを愛する」という文の意味とされるのである。だが、この命題は信念に構成要素として含まれておらず、ましてや実在してもいない。ただし信念が真である場合には、それを真にする〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という事実が実在しているのである。対応する事実がない場合この信念は偽であり、そこから抽象された命題も偽とされることになる。

多項関係理論は、観念や表象といった認識媒体を導入することなく、つまり直接知覚説を放棄することなく命題と事実を区別し、客観的な偽を取り去ることに成功していると言える。ラッセルは多項関係理論に次の二つの特徴づけを与えることにより、直接知覚説と整合的に客観的な偽の問題を解決している。

一つは、判断を観念や表象などの心的素材ではなく、あくまで実在する対象そのものを関係項とする多項関係であるとするので、構成要素のレベルでは実在そのものとの直接的な認知的接触を保持している点である²⁰⁾。〈地球は太陽の周りを回っている〉という命題は、たとえばラッセルが「地球は太陽の周りを回っている」と判断するという心的事実から抽象されたものであって、地球が太陽の周りを回るという天文学的事実そのものではない。しかしこの命題は、天文学的事実と同じく〈地球〉や〈太陽〉といった天体そのものを構成要素とする心的事実である。つまり命題を実在とはしないことで、判断内容全体としては実在との直接的接触が断ち切られているが、構成要素のレベルでは直接的接触が保たれているのである。これにより命題は、実在物から抽象されたものへと根本的にその存在性格を変えつつも、対象そのものを含むという論理的特性は『諸原理』のときと変わらず維持されているのである。

19) 「ある判断の単一の対象 *the object* として想定される時、その意味での「命題」は誤って抽象されたものである。なぜなら判断は一つではなく複数の対象を持つからである。人々が思考を「概念的に分節化されたもの *discursive*」だと論じるのも、判断における（知覚とは対照的な）対象の複数性のためである……。」[PM, p.44. (邦訳 146-7 頁)]

20) TK, pp.139-40 では、このことが多項関係理論の利点として強調されている。

もう一つは、多項関係理論は思考や信念、判断のみに適用され、知覚には適用されないことが挙げられる。知覚とそれ以外の命題態度を峻別し、知覚を主体と事実との二項関係であるとするので、ラッセルは実在する複合物との直接的な接触を知覚の場面では保持するのである²¹⁾。ここで興味を引くのは、知覚の不可謬性についてのラッセルの考えの推移である。『諸原理』の命題論では、判断も知覚も命題を対象とする二項関係であり、実質的には区別されていない。むしろ思考や判断を知覚に同化し、一定の内容の思考を持つということを経験的な事実の知覚と見なすことによって、ヘーゲル的な観念論を退けることを狙いとしていたと言える。しかし命題には真と偽どちらの可能性もあるため、命題の実在論においては知覚は必ずしも正しいとは言えない。実際、1905年の「真理の本質」では、理解された命題の真偽について誤る可能性が認められており、そのため斉合性が真偽判定の基準として有用であると説かれているが[NT, pp.503-4]、この時期の命題論では命題の理解とはそれを知覚（面識）することであることを踏まえれば、知覚が不可謬であることを否定しているに等しいと言えるだろう。一方、多項関係理論に移行した後では、知覚が命題ではなく事実との二項関係とされ、判断とは違って知覚は不可謬であり必ずその対象が存在するとされている[ONTF, p.156]。つまりラッセルは知覚の不可謬性という見解に、経験の反省という現象学的手続きを経てではなく、判断や知覚といった心的事実の論理構造の考察を経て到達したのである。このことは、不完全記号の学説を採るようになって以降のラッセルの哲学的方法論にも深く関わる問題であり、第II部での議論の主題となる。

『知識の理論』：論理形式の導入

だがこの初期形態の多項関係理論は、多くの問題を抱えていた。たとえばラッセルがソクラテスはプラトンを愛すると信じているとき、彼は〈ソクラテス〉、〈愛する〉、〈プラトン〉という三つの対象を面識するとされていたが、このときの〈愛する〉は関係項を関係づけていない。つまり「関係づける関係」ではなく、「関係それ自身」として面識されている。信念という心的事実を統一す

21) 本章の註19での引用箇所のほか、たとえば ONTF, p.156 を参照。また PLA, p.200 [邦訳 102 頁]でも、「……知覚に関しては、命題を介さず事実直接向かっている……事実が対象となるなら誤謬は即座に排除されるので、事実を知覚しているとすれば、そこに間違いの余地はなくなる」と主張されている。

るために関係づける働きを果たしているのは〈信じる〉である。それゆえ、ここでは〈愛する〉は関係としての固有性を持たず、〈ソクラテス〉や〈プラトン〉と同じ存在身分のものとして面識されている。だとすれば、この理論には〈ソクラテス〉、〈プラトン〉、〈アリストテレス〉の三つの面識から出発して、〈信じる〉(ラッセル、ソクラテス、プラトン、アリストテレス)という判断の成立を妨げるものが何もないのではないか。これは、言ってみれば「ソクラテスはプラトンをアリストテレスる」という、まったくナンセンスな判断を許容するということである。だが判断論は有意味な判断とナンセンスな判断をはっきり区別し、なぜ前者だけが判断として成立しうるのかを説明できねばならないはずである [Wittgenstein (1961), p.96 (邦訳 297 頁)]。

また以上の理論では、命題の構成要素の数により、それらに関係づける「判断」という心的関係の項数は異なることになる。だが、項数という論理的特徴において異なる以上、それらは同一の関係ではありえない。したがって、単純な多項関係理論においては、「判断」という同一の語で呼ばれる複数の異なる心的関係があり、また「信念」という同一の語で呼ばれるが、論理的には異なる種であるさまざまな心的事実が存在することになってしまう [Prior (1967), p.544]。

さらには、この単純な多項関係理論は、主体と判断という関係以外の項に関して何ら特別な役割を与えておらず、主体はそれらに対して対等に判断という関係を持つかのように語られている。もしそうだとすれば、構成要素となる項が同一であれば、それらから構成される判断もまた同一であり、かつその内容である命題も同一であることになると思われる。それ以上詳細に信念やその内容となる命題を区別する方法が、この多項関係理論では与えられていないからである。しかし、たとえば〈先立つ〉のような非対称的な関係を含む命題の場合、その同一性は構成要素の同一性によっては確定しない。〈A は B に先立つ〉と〈B は A に先立つ〉は同じ構成要素からなるが、まったく異なるだけでなく、両立不可能な命題である。多項関係理論は、構成要素の順序により異なる命題が形成されうることを説明すべきであるが、『哲学入門』の段階での多項関係理論ではそれがなされていないのである。

最後に、重大な困難として、多項関係理論が实在論的論理観を放棄してしまっていることが挙げられる。ラッセルは『諸原理』と同じく、『プリンキピア』でも命題を原始的概念とし、論理学を命題間に成立する普遍的な関係を研究するものとしているが、しかし多項関係理論によれば命題は判断という心的事実か

ら抽象されたものであって、实在の対象ではない。したがって、命題を対象とする論理学という学問は、实在のあり方に関する客観的な研究ではないとしなければならないのではないだろうか。つまり、多項関係によって客観的な偽を消去したはいいが、それに留まらず命題全体を实在から放逐してしまったために、論理体系全体が实在から離反してしまったのである。

論理学の体系化と数学の導出という、体系の整備に集中している『プリンキピア』では、論理学という学問自体の形而上学的地位に関してほとんど論じられていない。そもそも多項関係理論に対してすらほんのわずかの紙幅しか割かれていない。しかし1912年に書かれた草稿「論理学とは何か?」において「論理学は何を取り扱うのか」という問題に取り組んでいることから、当時のラッセルが多項関係理論がもたらす实在論的論理観に関わる困難を自覚していたことが見てとれる。この草稿でラッセルは、客観的な偽が存在するとすること、および記号や判断を論理学の対象とすることを回避するため(これは言うまでもなく实在論的論理観に基づいている)、論理学は命題にはかかわらず、真なる命題に対応する複合物すなわち事実を考察の対象とした [WL, p.55]。しかしラッセル自身が論じていたように、真なる複合命題が偽の命題を構成要素とすることがある以上、論理学が偽の命題を考察から排除することができるとは思われない。

こうした困難を解決し、实在論的論理観の回復を可能にしたのが、1913年の『知識の理論』において導入された「論理形式 logical form」という対象である²²⁾。ラッセルは『知識の理論』の第二部において多項関係理論を改良し、判断を下す際に主体は命題の構成要素となる個物や普遍だけでなく、論理形式という存在者も面識しているとした。さらには、「かつ」や「または」などの論理結合子の意味である論理定項や、「個物」や「普遍」などの基本的カテゴリーの意味となる抽象的概念も存在するとし、これらの理解を可能にする面識を「論理的経験 logical experience」と呼んだ [TK, p.98]。ラッセルは論理的経験の対象となるこれらの対象を一括して「論理形式」と呼んでいると思われるが、以下では「二項関係」や「主語-述語」などの命題形式のみを「論理形式」として論じることにする。

22) WLでもすでに論理学の考察対象として「形式 form」を取り上げているが、命題の形式の同一性を構成要素の置き換えという手続きによって定めることにより、その対象化を回避しようという姿勢がうかがえる。

先ほどと同じ例で説明するなら、ラッセルが〈ソクラテスはプラトンを愛している〉と考えるとき、ラッセルは〈ソクラテス〉、〈愛する〉、〈プラトン〉といった命題の構成要素となるものだけでなく、〈xRy〉という論理形式を面識している。そして

〈判断する (ラッセル, ソクラテス, 愛する, プラトン, xRy)〉

という、判断という心的事実を形成する。そして〈判断する〉という関係がその他の五つの存在者を関係づけるのだが、その際、〈ソクラテス〉、〈愛する〉、〈プラトン〉のそれぞれと〈xRy〉との間にも特殊な関係が成立する。〈xRy〉という形式は〈x〉、〈y〉、〈R〉という三つの変項を有しているが、ここで前二つの変項と残る一つは根本的に異なるものとされる。すなわち〈x〉と〈y〉は個物を値とするが、〈R〉は二項関係を値とするのである。したがって前者二つには〈ソクラテス〉や〈プラトン〉、〈アリストテレス〉を代入できるが、〈愛する〉や〈憎む〉を代入することはできない。逆に、〈R〉には〈愛する〉や〈憎む〉を代入できるが、〈ソクラテス〉などは代入できない。そしてこのラッセルの判断の例では、〈x〉と〈ソクラテス〉、〈y〉と〈プラトン〉、〈R〉と〈愛する〉という変項と対象の間に一定の関係が成立することにより、この判断の内容が「ソクラテスはプラトンを愛する」であって、「プラトンはソクラテスを愛する」や「愛するはソクラテスをプラトン」ではないことが決定される。これにより、〈愛する〉を関係それ自身としつつも、先の問題が解消されることは容易に理解されるだろう。判断は論理形式をその要素として含み、この論理形式が、その判断の内容が個物や普遍をそれぞれいくつ要素として持つ命題になるかを特定する。〈xRy〉という論理形式であれば、二つの個物と一つの二項関係でなければ、有意味な命題内容を持つ判断にはならない。かくして、「ソクラテスはプラトンをアリストテレスる」などというナンセンスな内容を判断する可能性は排除される。

論理形式は、第一には以上の問題を解決するために発案されたものであるが、それ以外の問題にも一定の解決を与えることができる²³⁾。内容となる命題の項

23) TK では、関係づけられる項の順序によって、同じ構成要素からでも異なる命題が構成されるという問題も解決が図られるが、これには論理形式は利用されない。ラッセルは、命題に対する各構成要素の「位置 position」という関係を導入することによって解決しようとする。この位置関係は、論理形式という命題の一般的形式によってではなく、具体的な構成要素の一つである関係に

数により、判断という関係が論理的に異なる種の関係になってしまうという問題は、次のように解決することができる。ラッセルは、判断という多項関係の成立においては、関係項の間に複数の関係が成立するとする。たとえば主体は、命題内容に含まれる項と論理形式のすべてに対して関係づけられる。そして重要なのは、論理形式と命題の要素となる関係、論理形式と命題の関係項、そして命題の要素となる関係と関係項の間に、それぞれ異なる関係が成立するとされることである [TK, p.118]。このラッセル自身の主張自体は、判断という関係の項数の問題を解決しているとは言えないが、論理形式と命題の要素となる項の間の関係という論点を生かし、次のような解決を与えることができると思われる。すなわち、判断という関係は、主体とその他の関係項を一律に関係づけるのではなく、まず主体と論理形式とを関係づけ、つぎに論理形式とその他の項を関係づけるという、一定の形成段階を持つ仕方では判断という複合物を形成するとするのである。このように考えることで、判断関係そのものは主体と論理形式との二項関係であるが、論理形式はその判断という二項関係からさまざまな多項関係を形成する役割を果たすとし、それによりさまざまな項数の命題内容を持つ判断が形成されることが可能になる。

さらに論理形式の導入は、實在論的論理観の回復まで可能にする。論理形式は一切の定項を含まず変項のみを含む、命題の普遍的な形式である (ただし複合的な命題・事実の形式の場合は、変項以外に論理定項を含む)。しかし、変項のみを要素とする複合物のすべてが論理形式であるわけではない。たとえば個体変項のみからなる〈xy〉はいかなる命題・事実の形式でもない。あるいは命題変項と論理定項のみを含む〈 $\neg P \rightarrow P$ 〉は、この形式を持つすべての命題が真になると認められるが、同様に命題変項と論理定項のみからなる〈 $\neg P \wedge P$ 〉は、決して真となることがない構造である。それゆえ、いかなる変項および論理定項の組み合わせを論理形式として認めうるかということが有意味な問いとなり、ラッ

によって確定されるものである [TK, p.146]。もっと正確に言えば、関係づける関係を、複合物に対する位置関係を含む、より項数が多く複雑で、構成要素が決まれば命題のあり方が一通りに決まる関係へと分析することによって解決するのである。ただしこれが問題の解決となっているかどうか、特に彼自身の見解と整合的な仕方では解決できているかどうか、疑問とせざるをえない。というのも、構成要素となる個物や普遍と、それが要素となる複合物全体との「位置」という関係は、複合物の内部構造の分析を意図して持ち出されているにもかかわらず、分析の対象となる複合物全体がすでに与えられていることを前提しており、實在にもタイプの制約を持ち込んでいる「知識の理論」の体系において、その制約に反する関係になってしまっている恐れがあるからである。

セルはこれこそ論理学という学問の課題であるとした [ibid., p.46]。そしてラッセルは論理形式を、命題だけでなくそれに対応する事実の形式でもあるとしている [ibid., Part II, ch V]。論理形式が事実の形式でもあるのなら、論理形式を考察の対象とする論理学は、実在そのものに備わる構造を取り扱う学問であることができる。つまり論理学は、判断に依りし判断から抽象された命題ではなく、実在の最も普遍的な構造を研究するのだとすることができるのである。

ラッセルにとって論理形式という概念がどれほど重要なものであったかは、彼が自らの哲学的営為を「事実の正しい論理形式を発見すること」であると規定し、論理形式の発見こそ哲学の課題であるとしている点にうかがえる [OKEW, pp.57-8 (邦訳 143 頁)]。正しい論理形式の発見は論理学としての哲学の課題であるが、現実に成立しているさまざまな種の実事が論理的に可能な形式のうちのどれを備えているかは、より一般的な意味での哲学が探究すべき課題なのである。たとえば一元論か多元論かという新ヘーゲル主義との存在論上の争いは、関係命題によって表される事実の論理形式を関係的とするか主語-述語形式とするかという問題であると回顧的に規定され、また(ヘーゲル主義的、あるいはロック的)観念論との認識論上の争いや客観的な偽の存在の問題は、信念や判断といった心的事実の論理形式が、外的な二項関係形式であるか、それとも主体を主語とする主語-述語形式か、それとも多項関係なのかという問題として捉え直されるのである [ibid., p.58 (邦訳 143-4 頁)]。つまり論理学としての哲学も、特定種の実事に関する哲学も、ともに論理形式の探求として理解しうるため、すべての哲学を論理形式の発見を目指すものとして規定することができるのである。ただし、論理学としての哲学と特定種の実事に関わる哲学では、探求方法が異なる。前者は、いかなる変項と論理定項の組み合わせが論理形式でありうるかを、あるいは事実の普遍的な構造を見てとろうとする探求であり、個別的・具体的な対象の知識に基づかないという意味でアプリアリな探求である [SMP, p.65 (邦訳 126-7 頁)]。それゆえ、この論理学としての哲学観に関する限り、『諸原理』での哲学的探究についての見解が一貫して保持されていると言える。一方、特定種の実事に関する哲学的探究は、実在するさまざまな種類の事実が、論理学によって見出された可能な論理形式のうちのどれを実際に備えているかを見てとろうとする試みであり、心理学などのそうした事実に関する経験的知識を踏まえた、経験的探究なのである。この経験的探究のあり方に関しては、第II部で詳しく論じることとする。

ここで、記述理論や多項関係理論といった不完全記号の学説を採用し、また論理形式という存在者を導入することによって、ラッセルの存在論が『諸原理』からどのように変化したのかを明らかにするため、改めてその基本的構造を図示してみよう(図2-1参照)。もっとも大きな変化は、命題と事実が区別され、命題が「論理的記号」の領域に移されたこと、そして表示概念が排除されたことである。

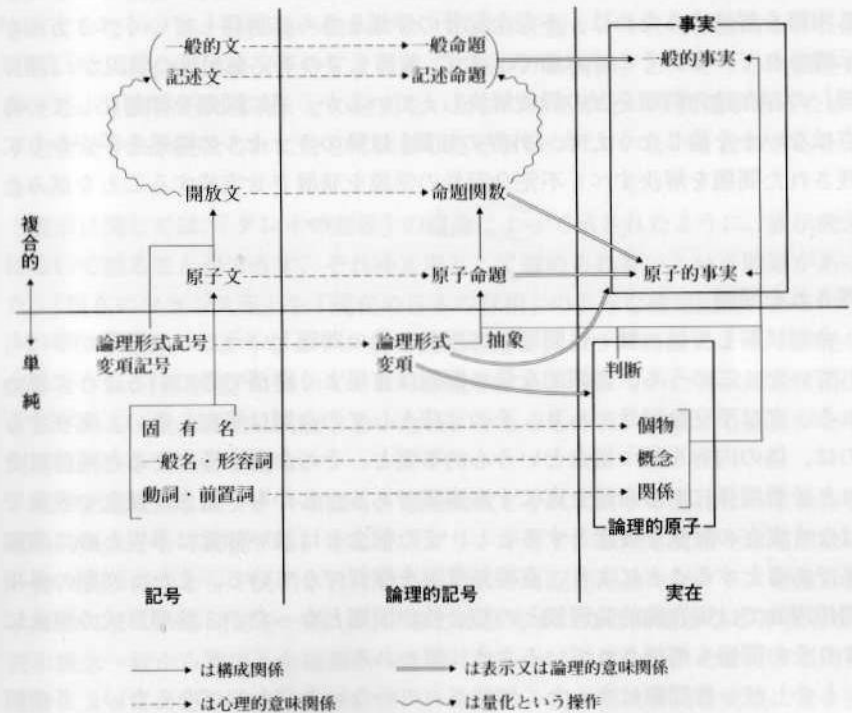


図2-1

2.4 「外界の知識」以降の不完全記号の学説

ラッセルが不完全記号の学説を具体的に展開し得たのは『知識の理論』までであり、1914年の『外界の知識』から1918年の「論理的原子論の哲学」に至る時期に、ラッセルが主として考察していたのは外界問題である。つまり、实在の形式に関する形而上学を洗練させるよりも、実際に経験される世界にそれをいかに適用するかという課題に取り組んでいたのである。それゆえ、論理形式の本性についての立ち入った議論は、1914年以降のテキストには見出せない。しかしこの時期に書かれた著作においても、『知識の理論』の体系に含まれている困難を解決するために、不完全記号の学説をさらに展開していくべき方向が示唆されている。そこで本節ではまず、前節までの不完全記号の学説が、『諸原理』の存在論の問題をどの程度解決しえているか、逆に問題を深刻化している点はないかを論じたうえで、『外界の知識』以降のラッセルの論述を手がかりに、残された問題を解決すべく不完全記号の学説を発展させ完成することを試みたい。

残された問題

命題に関しては、統一性問題と客観的な偽の問題という二つの困難が挙げられていた。このうち、客観的な偽の問題は首尾よく解消できているように思われる。文は不完全記号であり、その意味としての命題は实在しない。实在するのは、偽の内容を持つ信念という心的事実と、その命題を偽にすると同時にそれと矛盾関係にある命題を真にする事実である。しかも、信念が観念や表象ではなく实在の対象を要素とするとし、また信念とは違い知覚は事実との二項関係であるとする事により、直接知覚説を保持できている。また、初期の多項関係理論では实在論的論理観との整合性が問題となったが、論理形式の導入によりその問題も解消されているように思われる。

しかし統一性問題はまったく解決されていないと言わねばならない。多項関係理論により命題は实在しないとすることが可能になったが、しかしそもそも統一性は、ラッセルの存在論においては複合物一般に関して生じる問題である。『諸原理』においては事実は真なる命題の別名にすぎなかったが、多項関係理論と真理の対応説によって命題と事実を区別するのであれば、事実の統一性をい

かに説明するかという課題が残ることになる。具体的には、信念という心的事実や、命題に対応する事実の統一性が何に存するのが問題にならざるをえない。たとえば、〈信じる (オセロ, デスデモナ, 愛する, キャシオ, xRy)〉という判断において、〈愛する〉という関係は関係それ自身として生じており、〈デスデモナ〉と〈キャシオ〉を関係づける必要はない。しかしこの判断を偽にする事実〈デスデモナはオセロを愛する〉においては、〈愛する〉は関係づける関係として生じており、一つの事実としての統一性をもたらしている²⁴⁾。また先の判断に統一性をもたらしている〈信じる〉という関係も、別の判断に関係それ自身として含まれることがありうるだろう。つまり多項関係理論を経ても、なお、関係に関して二通りの生じ方が区別されており、統一性問題は解消されていない。統一性問題の根本には、項の存在論という汎実体論的な存在論において、複合物に統一性をもたらす「関係づける関係」と、そうした機能を持たない「関係それ自身」との区別をいかにつけるかという問題があったが、不完全記号の学説はこれに対してはまったく手をつけていないと言わざるをえない。

表示に関しては、「グレイの悲歌」の議論によって示されたように、表示概念について語る事ができず、それゆえ項として認められないという問題があった。「現在のフランス王」や「現在の日本の首相」のような確定記述、あるいは「すべての人間」のようなクラス名は記述理論と無クラス理論によって不完全記号とされ、『諸原理』においてそれらが意味するとされていた表示概念は消去されている。表示概念は实在しないため、そもそもそれに言及する必要がなく、問題は解決されたと言える。

だが記述理論も無クラス理論も、命題関数とそれに対する量化という操作を原始的概念として前提する。そして『プリンキピア』以降も変項や命題関数は一種の表示概念として説明されていた。それゆえ記述理論や無クラス理論は表示概念にまつわる問題を一掃しているとは言えず、ただ問題となる存在者を、表示概念一般から変項と命題関数へと切り詰めたにすぎない。たとえ多項関係理論によって命題を消去するのに伴い、命題の一部の構成要素を変項に置き換

24) たとえばTKにおいて、心的事実の分類に関して考察すべき点として、論理形式とその対象の論理的特徴に加え、「事実の一構成要素である、実際に関係づける関係」[TK, p.131]が挙げられている。たとえば〈信じる〉という関係が関係づける関係として含まれることを基準として、そうした心的事実「信念」という種に分類されるのである。

えるという手続きにより形成される命題関数もまた消去されるのだとしても、置き換えられる変項という対象そのものを消去する手段は与えられていない。つまり究極的には、表示概念にまつわる問題は、「我々が変項について語りうるのはいかにしてか」という形で残らざるをえないのである。

クラスに関しては、クラスを項と見なせないこととラッセルのパラドクスが問題となったが、このどちらもが、無クラス理論(分岐タイプ理論)によって解決されている。すなわち項と見なせないという問題に対しては、クラスは論理的虚構であり実在しないとする解決が与えられる。またクラスと命題関数に関して生じるパラドクスは、パラドクスを発生させるような命題の形成がタイプとオーダーの制約によって防止されている。またクラスと命題関数にタイプとオーダーの階層を認めることは、実在に階層の違いを認めることにはならない。なぜなら命題関数は多項関係理論により、そしてクラスは無クラス理論により消去する手段が与えられるからである。したがって分岐タイプの導入は論理の普遍性のテーゼに対する違反を意味しない。

このようにまとめると、不完全記号の学説は、すべてではないにせよ、『諸原理』の問題のかなり多くを解決しているように思われる。命題の統一性問題と、変項という表示概念に関する問題が残るものの、客観的な偽、変項以外の表示概念、そしてパラドクスの問題は、問題の発生源となる存在者を実在の領域から取り除くことによって首尾よく解決されているように見える。しかしこれらの解決では、つねに多項関係理論が重要な役割を果たしていることに注目しなければならない。客観的な偽の問題は偽の命題を、そして表示概念とパラドクスの問題に関しては命題関数を多項関係理論によって消去することが、そうした困難の原因となる対象を実在の領域に持ち込まないための手段となっている。だとすれば、変項と命題関数に関する問題を解決できなければ、ラッセルは表示概念一般やパラドクスに対しても決定的な解決を与えていないと言わねばならない。しかも、多項関係理論はその判断論としての内在的な問題を解消し、技術的洗練を重ねる過程で、変項のみを要素とする「論理形式」という存在者を導入しなければならなくなった。そしてこの論理形式は、多項関係理論をとりつつ実在論的論理観を維持するという仕方、論理的原子論の完成度を高める役割を果たす一方で、もともとあった困難をより深刻にしているのである。

論理形式による困難の拡大

表示概念に関する問題が変項に関して残ることはすでに指摘したが、同様の問題は論理形式に対しても生じる。なぜなら論理形式は変項から構成されるもの²⁵⁾だとされているからである。論理形式は、その形式をもつ命題一般を表示する表示概念であるということになるが、ではこの表示概念について語ることはいかにして可能になるのだろうか。たとえば $\langle xRy \rangle$ という二項関係形式について語ろうとしても、それが表示という機能を持つ限り、任意の二項関係命題(あるいは事実)について語ることしかできないはずである。そしてラッセルの言うように、さまざまな事実の論理形式を発見することが哲学の役割であるとすれば、哲学とは語りえない学問であることになる。

また、論理形式の導入は、ラッセル哲学の根本的見解である三つのテーゼとの関連でも多くの問題を惹き起こす。我々は2.3の末尾で論理形式を事実の形式とすることによって、多項関係理論をとりつつ実在論的論理観を保持できるとした。しかし論理形式が一種の表示概念であるとすれば、論理学の研究の際に実在の形式について語ろうとしても、それが表示する別の何かについて語ることになってしまうのではないだろうか。つまり、命題と事実が表示概念としての論理形式を共有するという見解は、そのままでは理解しがたい。表示概念として論理形式を解明することと、実在論的論理観は衝突するように思われる。ここで実在論的論理観を維持し、変項や論理形式を表示概念の一種とする考えを放棄するのだとすれば、それとは別のやり方で論理形式を解明しなければならない。そしてその際『知識の理論』のように論理形式を一種の対象としないようにするのだとすれば、論理形式に関する知識を直接知覚説とは異なる仕方

で説明する必要がある。

さらに、論理形式の概念は、実在するすべての対象が個体変項の値となるとする、論理の普遍性のテーゼにはっきり抵触している。「ソクラテスはプラト

25) このように考えられるのは、ラッセルが命題のすべての構成要素を変項で置き換えると論理形式が得られるとしているためである [PLA, pp.208-9 (邦訳 121-2頁)]。また論理形式が真理値を持ちうる [TK, p.130] としていることも、命題と同様に複合物であるということを示唆している。だが一方で、論理形式が変項からなる複合物だとしてしまうと、論理形式そのものとは別に、変項が組み合わされる形式が必要になるのではないかの懸念から、論理形式は単純な対象であるとしている箇所もある [ibid., p.98, 114]。この時期のラッセルによる論理形式についての議論は、それが果たすべき役割や他の概念との関係がほとんどであり、その本性に関してラッセルははっきりとした見通しを持ち合わせていないのである。

ンをアリストテレスる」のようなナンセンスな判断の可能性を排除するため、論理形式の内部で個物が充足すべき変項と関係が充足すべき変項が区別された。しかしこれは「個物も普遍も個体変項を充足する」とする論理の普遍性のテーゼの放棄以外の何物でもなく、「諸原理」以来のテーゼを否定することを意味する。

以上のように、論理形式の概念は『諸原理』の抱えていた問題を解消する際に重要な役割を与えられていたが、それは新たな困難の種となり、ラッセル哲学の根本的なテーゼを揺るがせるものでもあった。それゆえ、『知識の理論』におけるラッセルの多項関係理論がどれほど精緻な体系であるとしても、存在論として哲学的に満足すべきものではない。ラッセル自身は、ウィトゲンシュタインの批判によって『知識の理論』の執筆を放棄して以降、こうした困難を解決するために多項関係理論をさらに発展させることはしなかった。1914年の『外界の知識』や1918年の「論理的原子論の哲学」では、多項関係理論や論理形式に対する言及は見られるが、講演の記録ということもあり、概略が述べられているにすぎない。しかしそこには、不完全記号の学説を拡張し、論理形式に対しても適用するための萌芽的なアイデアが示されてもいる。そこで本節では、論理的原子論の立場と可能な限り整合的に、もっと紙幅が与えられていたならばラッセルが明示的に語っていたであろう、改良された多項関係理論を提示することを試みる。

改良の試み

ラッセルが『知識の理論』の草稿を放棄したのは、多項関係理論に対するウィトゲンシュタインの批判によるものであることはよく知られている。しかし、それがいかなる批判であったのかに関しては具体的な手がかりに欠け、研究者の間でもいまだ定説と呼べるものが存在していない²⁶⁾。しかし、ウィトゲンシュタインの批判の結果、ラッセルが自説の問題点をどこに見出したかははっきりしている。それは、論理定項や論理形式といった論理学の原始的概念が一

26) かつては、多項関係理論はタイプ理論に反することになるという批判だとする、Griffin (1985) や Sommerville (1981) の解釈が有力視されていたが、現在では、これは普遍と命題関数の区別を無視しているという批判を受けている。現在では、命題の統一性に関する批判だとする解釈 (Stevens (2005)) や、多項関係理論では真偽の二極性が説明できないという批判だとする解釈 (Carey (2007)) などが提案されている。

種の対象として実在しており、それらは面識されることにより理解されるのだという、实在論的論理観と直接知覚説に即して論理的知識を説明する点である。この点に関する反省は、『外界の知識』における次のような発言に見てとることができる。

クラスは記号上のものにすぎないということが受け入れられるなら、数は実際の存在者ではないこと、そして言葉の上では数が表れている命題が、実は数に対応する構成要素を含まず一定の論理形式を備えているだけであり、論理形式はその命題の部分ではないこと、これらが帰結する。実際、これは論理学や数学のあらゆる見かけ上の対象についても言えることである。たとえば「または」、「ではない」、「ならば」、「存在する」、「同一」、「より大きい」、「プラス」、「何もない」、「任意のもの」、「関数」などといった語は、「ジョン」あるいは「ジョーンズ」のような確定した対象の名前ではなく、意味を持つためにある文脈を必要とする語である。これらはいずれも形式的である、すなわちこれらの語が現れることは、命題のある特定の形式を指示しているのであって、構成要素を指示しているのではない。端的に言えば「論理定項」は存在者ではない。それを表す語は名前ではなく、その意味ではなく語自身について議論するときを除き、有意味な論理的言語となることはない²⁷⁾。[OKEW, p.208. (邦訳 273-4頁)]

この引用の、特に「意味を持つためにある文脈を必要とする語である」という言い回しから明らかのように、ラッセルは不完全記号の学説をより徹底して適用し、論理定項と論理形式を表現する記号を一種の不完全記号とすることによって問題の解決を目指す。すなわち、実在する対象を指示することによって有意味になる記号とせず、またそうした対象を面識することでその意味は理解されともせず、それが含む文全体の意味を、それらの記号の指示対象を含まない命題に対応させることで説明しようとするのである。

上の引用で不完全記号の学説によって消去されるべきとされているものうち、連言、選言、含意、否定の論理結合子については、ラッセルは「論理的原

27) ラッセルはここに註を付し、「ここで私は、友人のルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの未出版の著作を用いている」と断っている。

子論の哲学」において、その意味は真理表によって与えることができ、原子命題と論理結合子を要素とする分子的事実など存在しないと主張している。「p と q に対応する事実がそれぞれひとつずつあり、これら二つの事実に「p または q」という命題の真理は依存するのであって、一つの客観的な選言的な事実にはない。……二つの命題から作ることができる命題一般について、その意味を知るために必要なのは、「p の真偽と q の真偽が与えられたとき、いかなる状況でそれが真になるか」を知ることだけだと言えます。」[PLA, pp.185-6. (邦訳 65-7 頁。同 41, 43 頁も参照)] しかしその他の論理学上の原始的概念に関しては、ラッセルは何の見解も示さないか、あるいは率直に困惑を表明しているだけである。

存在量化や普遍量化といった量化という操作を示す論理記号の意味に関しては、ラッセルは明確な見解を持っていなかったと思われる。「論理的原子論の哲学」では、一般命題の存在が主張されてはいるが、原子命題に対する多項関係理論のような詳細な分析は与えられておらず、量化記号の意味が一般命題にどのように反映しているかが示されていないからである。一般命題に対応し、それゆえ構成要素を共有すべき一般的事実に関して、「何が一般的事実の正しい分析なのか、知っているふりをするつもりはありません。飛びぬけて難しい問題です。研究されているのなら、私自身それをぜひとも見てみたいと思っている問題です。技術的な面では、命題関数を使えば扱いが便利になるということは、確信しています。しかしそれで正しい分析が完了するわけではなく、その先に進めないでいるのです²⁸⁾とされていることから、おそらくラッセル自身は一般命題についても、自身の結論とすべき一定の見解を形成し得ていなかったものと思われる。

変項と論理形式を消去する方法をラッセル自身が見出せなかったことは、「論理的原子論の哲学」における次の発言からも明らかである。

論理学の命題の構成要素とは何かを理解することは、それほど容易なことではありません。「ソクラテスはプラトンを愛する」ですと、「ソクラテス、

28) *ibid.*, pp.207-8. (邦訳 119 頁) 一般的事実に普遍が含まれることは間違いないにもかかわらず、ここで命題関数による一般的事実の分析に疑問が出されていることは、PLA においても普遍と命題関数が異なる対象であると考えられていることを示唆している。また同頁に、存在に関して同様の発言がある。

「プラトン」、「愛する」が構成要素です。そこでそれぞれを x, y, R に置き換えてしまいますと、x も y も R もないもの nothing であって、構成要素ではありません。すると、あたかも論理学の命題は構成要素をすっかり欠いているように思えてきます。これが正解だとは、とても私には思えません。しかしそれ以外に言えそうなことといえば、「形式も一つの構成要素であり、一定の形式を持つ命題はつねに真である」ということぐらいしかありません。これが正しい分析であるかもしれませんが、私には非常に疑わしく思われます。[*ibid.*, pp.209-10. (邦訳 123-5 頁)]

ラッセルは変項を「ないもの²⁹⁾とし、実在する対象であるとは認めまいとした。しかしこの場合、論理学の命題は、通常の命題(たとえば原子命題)とは違い、まったく何の意味も持たないものになる恐れがある。原子命題もまた実在する対象ではなく「ないもの」であったが、その構成要素は実在する個体であり、それを要素とすることによって命題の有意味性が保証されていた。しかし構成要素である変項までもが「ないもの」とされ実在性が否定されるとき、それらから構成されるものとしての論理学の命題という対象を想定することすらできなくなる。つまり、原子命題も論理学の命題も「ないもの」であるが、その構成要素に一方が個体で他方が「ないもの」という違いがある以上、原子命題と同様の分析を論理学の命題、すなわち論理形式に与えることはできないのである。

ここでラッセルが逢着している困難を招いているのが、記号の意味理解を実在する対象との面識によって説明する直接知覚説の立場であることは明白であろう。変項も論理形式も論理体系において原始的概念とされているため、その意味理解は原始的であり他の概念の理解に基づくとはできない。しかし原始的概念の意味理解に関してラッセルが持ち合わせていたモデルは直接知覚説しかなく、それに従うなら変項や論理形式を実在物として物象化せざるをえない。また先の段落で取り上げた量化記号に関して、同様の理由を困難の原因として挙げるができるだろう。それゆえ、これらに対して不完全記号の学説を適用し、その意味を「ないもの」として消去するには、まずは意味理解に関して、直接知覚説以外のモデルを採用する可能性を探らなければなら

29) この概念については、2.5 で主題的に論じる。

い。

この点に関して注目すべきなのは、普遍の存在とその理解に関する見解の変化である。先に見たように、『知識の理論』においても、複合物の統一性は何によってもたらされるのか、あるいは関係づける関係と関係それ自身の区別をいかに説明するかという困難は残されていたが、この問題についてラッセルは「論理的原子論の哲学」において、次のように主張するに至った。

述語は述語として以外に生じることは決してないという事実が、重要なところだ。主語として生じていると思われる場合、そうした句は敷衍し説明すべきものなのです。……ここで、先と同じことが関係にもあてはまります。関係は関係として以外生じることはなく、主語として生じることは決してありません³⁰⁾。

ここでラッセルは、関係の存在様態を関係づける関係に一本化し、個物と普遍とが同様に「個体」という単一のカテゴリーに属することを否定している。「論理的原子論の哲学」でも、個物は伝統的に「実体」の概念で理解されてきた自立の対象であり、他のいかなる対象とも独立に存在しうるとされているが³¹⁾、それに対して普遍は個物と結合して事実を構成することなく実在することはありえないとされるのである。個物と普遍の存在性格を区別することは、『知識の理論』で論理形式を導入したときに、個物を値とする変項と関係を値とする変項を区別し、実在にタイプの違いを認めることによってすでになされていた。「論理的原子論の哲学」における以上の発言はそれを踏まえて、論理形式を利用せずに「命題の主語となりうるかどうか」を基準として、個物と普遍のタイプを区別するものだと言える。

普遍の存在のあり方に関する見解を変化させたのに応じて、ラッセルはもはや普遍の理解を、普遍という対象に対して面識という原子論的な二項関係が成立することとして説明しない。

「赤い」を理解するとは、「あるものが赤い」ということによって何が意味

30) *ibid.*, p.182. (邦訳 58-9 頁) また p.225 (邦訳 164-5 頁) では、「普遍が占めるべき位置に個物を置くことは決してできず、逆もまたしかりです」と言われている。

31) *ibid.*, p.179 (邦訳 51 頁) を参照。

されるかを理解することです。命題の形式を巻き込まざるをえません。何らかの「これ」の実例について「これは赤い」と知る必要はありませんが、あるものを赤いというときに何が意味されるかを知らねばなりません。……「赤い」を理解しているとは、「x は赤い」という形式の命題を理解していることに他ならないという、まさにこの理由で、述語の理解は名前の理解よりわずかながら複雑なのです。まったく同じことが関係にも、それどころか個物以外の一切について成り立ちます。たとえば「x は y に先立つ」における「先立つ」を取り上げましょう。私たちが「先立つ」を理解しているのは、もし x と y が与えられたならば、「x は y に先立つ」は何を意味することになるか、これを理解しているときです。それが真かどうかを知っているということではなく、命題を理解しているということです。
[*ibid.*, p.182. (邦訳 58-9 頁)]

普遍の理解が命題の形式を巻き込むということは、言い換えれば、その普遍が命題の中でどのような役割を果たすかの理解を伴うということである。そしてラッセルの意味理解に関する実在論的立場からすれば、これは命題は少なくとも一つは普遍を含むべきことなど、『知識の理論』では論理形式を措定することによって説明されていた命題の特徴を、普遍に担わせることを意味する。つまりラッセルは、関係づける関係と関係それ自身の区別の否定によって、論理形式を不要とすることを目指していると言える。

論理形式は事実の形式でもあり、論理形式が説明すべき命題の特徴は事実の特徴でもあった。それゆえ、ここで言われている「命題の形式」は事実の形式でもあるとしてよい。それを踏まえれば、普遍の存在とその理解に関し、ラッセルは次のような見解を採ろうとしていると言えるだろう。普遍は、それが複数の個物を結びつけることにより形成される個別的事実の要素となることなくしては実在しない。そして普遍を理解するということは、それが複数の個物を結びつけて形成する個別的事実を知覚したり、あるいは文や発話を通じて原子命題を理解する際に、そうした事実や命題を含む反復可能な特徴³²⁾として識別することに他ならない。つまり、普遍の存在と理解は、何らかの個別的事実や命題といった複合物という脈絡に位置づけられることに依存的であるとするの

32) ここで「反復可能」を、異なる複数の位置に同時に存在することが可能であることとしておく。

である。「関係は関係として以外生じることはなく、主語として生じることは決してありません」という、先の引用文中の主張を重く見る限り、ラッセルが採ろうとしている立場は以上のように考えるべきだと思われる。

普遍の存在と理解を以上のように考えると、ある普遍を理解しているとは、事実を知覚する際に、それを担っている個物を担っていない個物から区別して把握できること、あるいは文や発話によってある対象がその普遍を担うことが表現されているとき、それがいかなる事態であるかを理解できることだと言える³³⁾。つまり普遍の理解は、当の普遍だけではなく、それを担う任意の個物への関わりを含む。このとき我々は、命題関数に含まれる一種の表示概念であるとされた変項という「ないもの」を、普遍の理解において発揮される任意の個物へと関わる能力として理解することができる。そしてこの能力が、記号表現の形式のために普遍の理解から独立のものとして考えられる（誤って抽象される）ことにより、あたかも変項という「ないもの」が存在しているかのように思われるのであるとして、不完全記号の学説を変項に適用することができる。

たとえば〈xは赤い〉という命題関数は、〈x〉という変項と〈赤さ〉という普遍を構成要素とするわけではない。〈赤さ〉という普遍を理解しているとは、任意の個物が赤いかどうかを識別できるということであり、ある種の不確定性を含む状態にあることである。我々は赤さという性質について、いかなる個物がそれを例化しているかを無視して考えるときには「赤」のような抽象名詞を用いるが、すべての赤いものについて推論する際など、その不確定性を明示化しなければならない場合には、その普遍は「xは赤い」という開放文によって表現する。「x」という変項記号によって表現されているのは、つねにある普遍の理解とともにしか発揮されない能力なのであるが、しかしその開放文が「赤」という単独で利用しうる表現を含んでいるため、「x」と「赤」のそれぞれが表現している要素を、開放文が意味するものである命題関数は含んでいると考えると、

以上のように、普遍の理解は「命題の形式を巻き込まざるをえない」という「論理的原子論の哲学」におけるラッセルの考えから、「普遍の理解の一部である任意の個物に関わる能力が、文字という（心理的）記号における表現単位のた

33) 以下では、論述を簡潔にするために、普遍が識別される脈絡となる複合物として、事実のみに言及することにする。

めに、普遍の理解という文脈から抽象され対象化されて考えられ、変項という論理的記号、「ないもの」が存在するとされることになる」という仕方で、変項やそれを要素とする命題関数についての不完全記号の学説を作ることができる。同様に、普遍に対する変項や論理形式に対しても考えることができるが、その詳細については次章に譲ることとする。

だが、先の引用で示されたラッセルの見解には、受け入れるべきではないと思われる点もある。それは述語や関係が「主語として生じることは決してない」とされている点である。これが普遍の理解は命題の形式を巻き込むという重要な洞察と合わせて述べられているのは、ラッセルが「命題の論理的な主語となりうるものは、他のいかなる対象からも自立自存的な実体である」とする、『諸原理』以来の実体性に関する論理的基準を、この時点でも保持しているからである。それゆえ、たとえば「赤さは色である」のように、普遍について何かを述べている文が表現する命題もまた、〈赤さ〉を主語としない形式を持っているはずであり、それゆえその形式を反映した文によってそれを表現しようとするならば、「赤さ」という名詞を主語としない文にパラフレーズしなければならないとされるのである。しかし、普遍の理解が命題の形式を巻き込むということと、普遍は命題の主語となりえないとすることは独立であり、そして前者は受け入れるが、後者は拒否すべき理由が存在する。

一つは、一般的事実を分析する必要上の理由である。ラッセルは『諸原理』から「論理的原子論の哲学」に至るまで一貫して、個別的な事実だけでなく一般的な事実も存在するとしていた。そして関係づける関係と関係それ自身の区別を認めていた『哲学入門』では、一般的事実は普遍についての事実であるとされている。つまりこの時点でラッセルは、一般的事実は普遍を主語 (subject) とする事実であると考えていた。ところが普遍の存在様態を「関係づける関係」に一本化する際、ラッセルはそれを「普遍は事実や命題の論理的な主語になりえない」とすることだとしてしまう。その結果、「論理的原子論の哲学」では、ラッセルは一般的事実に対する適切な分析が与えられなくなってしまったのである [ibid., pp.207-8 (邦訳 119 頁)]。次章で見ると、我々は『哲学入門』での一般的事実の分析を受け入れ、一般的事実は普遍間に (それよりタイプの高い) ある関係が成立することからなるとする。そこで我々は、普遍が命題の主語になりうるのではなく、ある対象が命題の論理的な主語になりうることを、それが他の一切の対象から自立自存的であることとする見解のほうを否定すべきであると

する。

もう一つは、個別的事実の知覚とは独立に、それを事例とする一般の知識を得る可能性を認めなければならないという理由である。ラッセルは『諸原理』以来、経験主義による論理学や数学の知識の説明に反対し、それらを個別的な経験からの一般化によるとすることはできないと主張してきた。そして『哲学入門』で明言されているように、論理学や数学の知識、そして帰納的推論を可能にする原理の知識などは、個別的な経験による正当化がなしえないアприオリな知識であるとした³⁴⁾。また、『哲学入門』では物体は面識できず、面識されたセンスデータからの推論により知られるとされたが、この推論を可能にするのは、一定の性質を担うセンスデータには原因があるという一般的知識である。この一般的知識が、個別のセンスデータと物体間の因果関係の成立という個別的事実の知覚を通じて得られるとしてしまうと、物体の面識を不可能とする『哲学入門』の立場では獲得不可能な知識になり、外界に関する懐疑論が成立してしまう(いわゆる「知覚のヴェール」の問題)。そこでラッセルは、センスデータの原因が存在するという一般的知識を、その個別事例の経験とは独立に知りうるという意味でアприオリな知識であるとした³⁵⁾。

このような、ラッセルの一般的知識に関する反経験主義的志向は、先の「論理的原子論の哲学」からの引用文にも表れている。すなわち、普遍の理解は命題を巻き込むとしつつも、「何らかの「これ」の事例について「これは赤い」と知る必要はありませんが、ある物を赤いというときに何が意味されるかを知らねばなりません」としているように、ラッセルは明らかに、ある個物が赤さという普遍を例化することからなる個別的事実の知覚とは独立に、赤さは理解しうると考えている³⁶⁾。そして知識や意味理解に関して実在論的な立場に立つラッセルは、アприオリな知識の成立を、我々の心に内在的なカテゴリーや規約に訴えて説明するのではなく、認識独立的である一般的事実を直接的に知る、

34) 「アприオリな知識」は普通、主観が自身にとって外的な対象を経験することなく得られる知識を意味するが、認識を外的関係としての面識によって説明するラッセルの場合、アприオリな知識は個別的な感覚経験とは独立という意味であって、一切の経験から独立という意味ではない。

35) PP, p.62 (邦訳 134-5 頁) を参照。

36) また PLA, p.206 (邦訳 117 頁) では、「一般命題を私たちは知っているように思えるが、もしそうした知識があるなら、一般命題の原始的な知識(推論によらずに得られた一般命題の知識という意味です)がなければならぬ」と主張され、これが一般的事実が存在するとすべき認識論的論拠とされている。

つまり面識することによるのだとする。だが、普遍が個別的事実における関係づける関係としてしか存在しえないのだとすれば、個別事例の経験とは独立に知りうる一般的事実など存在しないことになり、以上のようにアприオリな知識を説明できなくなる。

このように、普遍が個別的事実の要素としてしか存在しえないとすることは、ラッセルの哲学に大きな変更を要求し、その重要な見解を覆してしまう恐れがある。そこで我々は、「普遍の理解は命題の形式を巻き込む」という「論理的原子論の哲学」の論点を受け入れつつも、普遍の存在と認識については可能なかぎり以前の見解を保持した立場を採用し、以下のように考えることにしたい。すなわち、個物が担うタイプ1の普遍を例として説明すれば、その普遍は事実という脈絡の一部としてしか実在せず、その他一切の対象(個物であるか普遍であるかを問わず)から論理的に独立に実在するわけではないのだが、それが要素となる事実としては、個別的な原子的事実だけでなく、タイプ2の普遍によってそれらが関係づけられて成立する一般的事実もまた存在するとする。そしてタイプ1の普遍は、個別的事実においては事実を統一する関係として生じているが、一般的事実においてはその主語として生じているとし、さらにこのことは「関係づける関係」と「関係それ自身」の区別を必要としないとする。つまり、関係はその「述語的本性」を保ったまま、高タイプの命題の主語になりうるとする。また普遍の理解、すなわち普遍の面識は、それを関係づける関係として含む事実(それゆえタイプ1の普遍については個別的事実)という脈絡において、要素として識別されることにより成立するとするが、一度こうして理解された普遍のみを含む一般的事実は、その個別事例とは独立に知覚しうるとしたい。たとえば〈赤さ〉や〈原因である〉という普遍の面識は、〈これは赤い〉や〈私のこの発言の原因はこの信念である〉のような、知覚可能な個別的事実において、その関係づける関係として識別されることにより成立する³⁷⁾。しかし一度これらの普遍が面識されると、〈赤さのセンスデータにはある原因がある〉という、それらを要素とする一般的事実は、その個別事例を経験することなく知覚され

37) こう考えることは、前段落で指摘した PLA からの引用に見られるラッセルの考えに反する。しかし私には、普遍を例化する個物を一切経験することなく、その普遍が認識されうるとする考えは、理解しがたい。そして PP では物体の内在的性質を不可知とされているが、普遍がそれを例化する個物と独立に知りうるのだとすれば、物体は面識しえないとしても、普遍であるその内在的性質を面識不可能とする理由はないはずである。こうしたラッセル自身の見解からしても、普遍の面識と個物の経験を完全には独立させるべきではないと思われる。

うるとする。このように考えることにより、タイプ1の普遍についての一般的知識を、個別的知識とは独立に得ることができると認めることができる。

ラッセル自身が以上のようにして、存在と認識に関して事実ないし命題という脈絡から独立でないとするのは普遍のみであり、「論理的原子論の哲学」においても個物は他のいかなる対象から独立に存在しうるとされ、またその理解である面識は他の対象の面識から独立でありうるとしている。だとすれば、面識の対象とされるセンスデータもまた、一切の感覚可能な性質を持つことなく存在することがありえ、かつ意識されることがありうることになる。このような帰結が出てくることから明らかなように、個物の存在と認識についてラッセルのように考えることは、個物を「裸の基体 bare particular」とすることを意味する。だが、個物を面識することは、その個物を他の一切の個物から区別することができるということである。だとすれば、ラッセルは、ある個物と他の個物を分けるいかなる性質や関係を一切認識することなく、個物の区別が可能であるとするようになる。しかしそうした区別がいかにして可能なのか、理解しがたいと言わざるをえない³⁸⁾。

そこで我々は、個物に関しても普遍と同様に考えることにしたい。個物は原子的事実という脈絡において、普遍の担い手となるかぎりで実在するとする。つまり、実在の最小単位は、個物や普遍といった論理的原子ではなく、個別的な原子的事実や普遍を要素とする原子的事実であるとする³⁹⁾。そして個物の認識すなわち面識を、ある個別的な原子的事実が知覚されたときに、普遍の担い手となっている個物を識別しているということ、さらにそれが別の普遍や個物と結合したときにいかなる事実が成立することになるかを理解することである。以下、本書で面識について語る際には、その対象が個物であれ普遍であれ、事実や命題という複合物におけるその識別を意味することとする。

ただし、個物と普遍の面識には相違点も存在する。論理形式は各事実や命題が持つ形式として理解されていたが、個物と普遍に関する以上の見解によれば、事実や命題に形式をもたらず役割は普遍が担うことになる。なぜなら普遍は特

38) 個物を「裸の基体」とすることについての形而上学的困難としては、Armstrong (1978) を参照。特に pp.106-7 では、そうした個物が普遍を例化する際に、個物と普遍の関係についてブラッドリーが指摘した無限後退の問題が生じることが指摘されている。

39) この点で我々は『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインの見解に従うことになる。Wittgenstein (1922), p.30 (邦訳13頁) の、1.1 および 2.011 を参照。また普遍と独立に個物が存在しうるとすることの困難については、Armstrong (1997), pp.123-6 を参照。

定の項数の個別的な原子的事実の要素にしかなりえないが、個物は任意の項数の個別的な事実の要素になりうるからである。そこで、ある事実や命題の論理形式の理解は、個物ではなく普遍の理解に基づくと言えるだろう。すなわち、事実を知覚したり、発話された文の表現する命題を理解することにおいて、それが含む関係を識別することができるように、我々はその事実や命題が持つ構造も理解できていることになるが、それこそがその事実や命題の論理形式を知っているということだとする。

個物と普遍の理解を以上のように考えることは、意味理解は個体に対する原子論的な関係であるとする、ラッセルにとって根本的な見解を退けることを意味する。だが、意味理解の論理的可能性について論じる際には、確かにラッセルは原子論的立場をはっきりと表明するのだが、第Ⅱ部で見ると、我々が実在をいかにして知るかを経験的な観点から解明するときには、ラッセルは我々がここで採用したのとはほぼ同じ見解を採っている。このように議論の文脈によって異なる見解が表明されるのは、第1章で見たように、「面識は論理的原子に対する二項関係であり、他の一切の存在に関する知識から独立である」とする論点が、論理的議論に基づいて多元論と実在論を否定する新ヘーゲル主義者(観念論的一元論者)のアプリオリな議論に抵抗し、多元論と実在論の論理的可能性を守るための議論だったからである。すなわち、たとえ実際には我々の認識が事実という複合物から始まるとしても、論理的にはその要素を単独で面識し認識することができるということによって、観念論や一元論を必然的に導出する道を断ち切るためのものであった。しかし、観念論や一元論を意味理解や認識の可能性から必然的に帰結させないために必要なことは、原子的事実が相互に論理的に独立であるとする、そして原子的事実が認識主体から独立であるということである。個物や普遍が他の一切の対象から独立に存在し認識しうるとする必要はない。一方、我々の実在の認識がいかにして成立するかを経験的観点から論じる時、ラッセルは事実を単一の対象とする面識(これをラッセルは「知覚」と呼ぶ)から出発し、それを分析してその構成要素を識別し、再結合して命題とすることにより認識するとする。そして本書の目的である、外界の知識の分析やその正当化に関する議論に関わるのは、経験的観点からのこうした見解のほうであり、面識が二項関係であるという論理的観点からの議論ではない。それゆえ、個物や普遍の存在と認識について本節で述べてきたような見解を採ることは、第Ⅱ部以降の本書の議論をラッセル解釈として大きくゆが

めるものにはならないのである。

また以上の議論によっては、まだ変項や論理学の命題の理解に関する説明が与えられてはいないし、また量化記号の意味の対象化を回避する手続きが示されていない。しかし、そのために必要な手がかりは十分に与えられている。次章において一般命題や論理学の命題について多項関係理論を展開する際に、実際にそうした説明を与えることにする。

2.5 「不完全記号」概念にまつわる注意点

「ないもの」の構成原理としての不完全記号論

不完全記号の学説は、『諸原理』の存在論にとって重荷となっていた諸対象を、実在する単純な対象（項または論理的原子）へと還元し不要とする手続きである。この学説のこうした役割はこれまでも十分に注目されてきたし、たとえば外界論における物体のセンスデータへの還元など、ラッセルの他の議論との関連も認められてきた。しかしこれは、不完全記号の学説が果たすべき役割の半面にすぎない。

記述理論も無クラス理論も、確定記述句やクラス名の意味とされる表示概念を消去する手続きである。無クラス理論の場合はさらに、クラスや外延としての関係を論理的虚構として実在物から取り除く手続きでもある。しかしその手続きを『プリンキピア』の記号体系に即して定式化するとき、ラッセルはそれらの表現を、通常の文脈では名前と同様に扱えるように、きわめて慎重に配慮している。『プリンキピア』序論の第3章「不完全記号」の末尾で、その章での議論を総括する際に、ラッセルは確定記述を意味するように見える記号列「 $(ix)(\phi x)$ 」、クラスを意味するように見える記号列「 $\hat{x}(\phi x)$ 」、そして外延としての関係を意味するように見える記号列「 $xy|\phi x, y|$ 」などの不完全記号が、関数に対する「代入項を直接表現するかのような使い方をすることができる」とし、それを可能にする定理を、それぞれの不完全記号に対して五つずつ挙げたうえで [PM, p.82 (邦訳 268-9 頁)]、次のように主張する。

これら三群の諸定理から次のことが帰結する。それは、命題関数から得られる様々な（あるいは一定の）値の同値性だけを考え、命題関数の同一性については考慮しないかぎりには、こうした不完全記号も、直接に対象を表す諸

記号と同様の同一性に関する形式的規則に従うということである。命題関数の同一性についての考慮は、我々の形式的推論の中には決して現れることがないのである⁴⁰⁾。

そして、これらの不完全記号が「直接に対象を表す諸記号」つまり固有名と同様に扱うことができない文脈として、記述の対象が存在しない場合と命題態度、とくに対象の同一性の認識に関わる文脈を挙げている。つまり『プリンキピア』の体系は、こうした限定された文脈を除いて、不完全記号を固有名と同等に扱うことができるように配慮して形成されているのである⁴¹⁾。

記述句と固有名を、そうした文脈以外で同等に扱うことは、記述句を含む文の扱いを容易にするという利点があるが、しかしそれは一方で、認識主体に自分の心的状態やその対象のあり方を誤認させる働きも持つ。すなわち、記述句と固有名を同等とすることで、記述句が表現する記述が論理的単位として実際に命題に含まれていると考えられたり、あるいは本来は構成されたものである記述が、固有名が意味する対象と同様の実在物であると誤認されるという事態が生じるのである。

こうした事態が生じる理由として、ラッセルは「面識による知識と記述による知識」において、ある固有名を含む文と、それと同じ対象を記述する記述句でその固有名を置き換えた文が（あるいはそれぞれが表現する単称命題と記述命題が）同値であることと、表示対象こそが言語使用において我々が問題にしたい事柄であるという二つの論点を挙げている [KAKD, p.160 (邦訳 266 頁)]。また『知識の理論』では、〈私の現在の注意の対象は存在する〉のような記述命題を表現しよ

40) PM, p.83. (邦訳 270 頁)

41) *ibid.*, p.1 (邦訳 19 頁) では、「いずれの事例においても、最終的に採用される表記法は、その真の意味は確かにきわめて複雑なものであるとはいえ、見かけ上は単純な意味を持つのである。そして或る決定的論点に関わる場合を除けば、何の危険もなく、真の意味に代えてこの単純な意味によって思想上の操作を行うことが可能である」と言われている。また別の箇所 [ibid., p.24 (邦訳 86-7 頁)] で「定義の結果として、我々がクラスを用いる仕方は、日常的な思考や会話におけるクラスの用法におおむね一致する。つまり、前者の最終的な解釈は同時に後者の解釈にもなっているのである。したがって、第2章におけるタイプの分類は、我々が矛盾した結論に至る推論の列車に乗り込まずに済ませることを正当化する際に、唯一のそして本質的な役割を果たす。その正当化とは、命題と思われたものが実は無意味なものでしかなかったということである」と言われているように、『プリンキピア』におけるこうした方針は、我々の日常的な思考や言明が含んでいる存在論的コミットメントに可能なかぎり一致させたものとなっているのである。

うとして、「これは存在する」と固有名を使用する場合のように、固有名を用いて記述命題を表現することが、誤認の原因として挙げられている [TK, p.138]。まとめれば、対象が存在しない場合、命題態度、そして同一性が問題になる場合といった文脈以外の通常の文脈では、対象を同じくする固有名と記述句を入れ替えただけの二つの文 (が意味する命題) が同値であるという事実、信念形成やコミュニケーションの際の意図、そして命題を表現するために用いられる語、この三つの要因のために、「記述と真の固有名が混同され」[*ibid.*, p.138]、「記述を含む命題が表示対象 denotation を含むと考えられてしまう」[KAKD, p.160 (邦訳 267 頁)] のである。こうした認識対象の論理的本性の誤解は、そうした認識という心的状態のあり方に対する誤認を伴わざるをえない。なぜなら、固有名の指示する対象に対する認知関係は面識という二項関係であるが、記述内容に対する関係は信念ないし判断という多項関係であり、実際には異なる関係だからである。固有名と記述句の混同は、「信念と現前 [面識] が区別されない」[TK, p.141] という事態まで惹き起こすことになるのである。

このように不完全記号の学説は、認識主体に自身の心的状態やその対象のあり方を誤認させ、判断を通じて自らが構成した非実在的な対象を実在する対象であると誤認させ、認識内容に不透明性をもたらすという認識論的役割を担っているのである。この学説のこうした役割は、第Ⅱ部で「分析」という作業の必要性を示すものとして、さらに第Ⅲ部では、認識主体本人の視点からとらえた際の経験内容のあり方を説明するものとして、重要になる。

構成されたものを単純な実在物と同等のものとして扱おうとする、以上のような不完全記号の学説の特徴は、『プリンキピア』の体系の整備の仕方にも影響している。記述やクラスについては、『プリンキピア』の論理体系の内部でその有意味性を与える文脈が定式化され、それを構成されたものとして存在論的に解消する方法が提示されるが、同じく不完全記号によって意味されるべき存在とされる命題と命題関数は原始的概念として前提されている。つまり『プリンキピア』の体系の内部では、それらは「思考による操作の単位」となる存在者として受け入れられているのである。文や開放文のような、それらを表現するかに見える記号が不完全記号であることを示す多項関係理論は、『プリンキピア』の体系の外部にあり、『プリンキピア』で提示された論理体系全体が、判断から抽象され対象化された存在にコミットすることにより成立するものであることを明らかにする役割を果たすのである。

以上のような『プリンキピア』の論理体系が持っている方針をまとめれば、命題、命題関数、記述、クラス (外延としての関係) は、存在論的観点からすれば一定の文脈から抽出されたものであり実在しないとすべきだが、『プリンキピア』の体系内部では、論理操作の単位として扱われ、自立的な対象とみなしてよいとするものとも言える。だとすれば、この論理体系内部の観点から見れば、不完全記号の学説は、これらの対象が存在すると認められるための条件を述べた、適切な構成原理を与える役割を果たすと言えるだろう。分岐タイプ理論が構成主義的性格を持つことは知られているが、ラッセルは命題関数とクラス以外の諸対象に関しても構成主義的立場に立っているものであり、その構成原理を最終的に与えるのは多項関係理論なのである。タイプとオーダーの階層も、それが対象とする命題と命題関数と同様に多項関係理論によって、個別的判断から一般的判断が形成される判断間の秩序から抽象され構成されたものであることを示すことができる⁴²⁾。

不完全記号の学説が、命題や命題関数、クラスの構成原理として理解されるとしても、それらと、個物や普遍といった実在するとされる対象、すなわち論理的原子が同等の存在とされるわけではない。前者が我々の判断に依存的な対象であるのに対し、後者は判断から独立に存在することができ、優れて実在する対象であるという違いがあるからである。ラッセルがこの違いを明示的に論じているわけではないが、しかしラッセルが実在する論理的原子と構成された対象を区別していることは、彼の存在に関わる議論や用語法から明らかであると思われる。

存在に関するラッセルの見解として知られているのは、「存在は命題関数の性質である」とし、そしてその帰結として論理的固有名を主語とする存在文 (たとえば「これは存在する」) は無意味であるとする、「論理的原子論の哲学」での主張⁴³⁾であろう。すなわち存在文はある命題関数が何らかの代入項によって充足されることを表現するものであり、それゆえ存在の概念は命題関数についての関数として理解するべきであって、論理的固有名が意味する個物を代入項とし

42) 命題や命題関数、あるいはクラスを判断から独立のもののみならず、一切の自己言及を禁じたり、タイプだけでなくオーダーの区別を要請することは不当なまでに禁欲的なものと思われるだろう。しかし多項関係理論にまで遡って分岐タイプの形成を踏づけることで、オーダーの区別の要請が判断の構成方法からの帰結であることを明らかにし、オーダーの区別を形而上学的に正当化することができる。この点については次章を参照。

43) PLA, pp.204-5, 211-3 (邦訳 111-4, 129-32 頁) を参照。

てとる関数ではない、とする主張である。

ただし、ラッセルの「存在は命題関数の性質である」という言い直しには、誤解を招きかねない点が二つある。一つは「性質 property」という用語の多義性の問題である。ラッセルの「性質」は、開放文という記号、命題関数という構成された対象、そして論理的原子としての普遍、以上三つの意味で使用される用語であるが、ここでは二つ目の命題関数として理解すべきである。この言い直しが出てくる文脈でラッセルが論じているのは、ある存在文の有意味性が、その文によって存在するとされる個物の実在を含意しないことを、文が表現する命題の構成要素の観点から示すことである。そのため、「命題関数の性質」とするときの「性質」を、「開放文に対して適用される二階の開放文」と理解することはできない。また「論理的原子論の哲学」に先立つ『外界の知識』において、すでに「存在」は不完全記号であるという見解が表明されているため⁴⁴、〈存在〉という普遍が実在するとラッセルが考えていると解釈することはできない。それゆえ、「存在は命題関数の性質である」という主張は、「存在は命題関数についての関数である」ことを表現しようとするものとして解釈すべきである。

もう一点は、「存在は命題関数の性質である」とは言っても、ある存在命題が真である場合に存在することになるのは、その命題が含んでいる命題関数ではなく、その命題関数を充足する代入項であることである。たとえば〈赤いものが存在する〉という存在命題が真であるとき、その命題によって存在することが主張されているのは、〈xは赤い〉という命題関数ではなく、この命題関数を充足する代入項である。それゆえ、色という性質を担うのがセンスデータであるとすれば、この存在命題によって存在が主張されているのは、論理的原子であるセンスデータであり、判断によって構成される命題関数ではない。だとすれば、「論理的固有名を主語とする存在命題は無意味である」という主張は、個物は存在しないとするものでも、個物の存在は決して主張できないとするものでもない。そうではなく、「存在する」が表現しているのはそもそも判断を通じて構成される命題関数の一種であり、しかもその命題関数の構成手続きからして、それは個物を代入項として取ることができないとするものとして、理解すべき主張なのである。個物はもちろん存在するのだが、個物の一つ一つについ

44) 本章75頁での引用を参照。

て、「これは存在する」と主張することはできない。個物の存在を主張したければ、それがあつた命題関数を充足するということを通じて、迂回的に語るしかない。こうしたことをラッセルは主張しているのである。

以上のようにその内実が明確化されうる、「存在は命題関数の性質である」という主張から、ある重要な論点が帰結する。それは、実在する論理的原子と、構成されるものであり判断依存的な命題や命題関数の存在性格の違いを、「存在する・しない」の違いとして表現できない、ということである。理由は二つある。一つは、論理的原子一般について、あるいは個物一般や普遍一般についてそれらが存在すると主張することはできるとしても(たとえば〈xは個物である〉という命題関数を存在量子で束縛することにより、有意味な存在命題を作ることができる)、個別の個物や普遍について、「これは存在する」と主張することが無意味であることである⁴⁵。個物や普遍などの実在する論理的原子を、命題や命題関数などの構成される対象から区別するとき、論理的原子の一つ一つについて、これらはいずれも存在するが、命題や命題関数は存在しないと言うことはできないのである。

この理由に基づく、実在するものと構成されるものの違いの語りえなさを乗り越え、それらを区別するために、ラッセルは「実在するものの在庫目録に掲載される」という言い直しを用いて、実在する論理的原子や事実を特徴づけることを試みる。すなわち、個物や普遍、そして個別的事実や一般的事実は、実在する物の「在庫目録」に掲載されるが、命題や命題関数などの構成されるもの、そしてそれらの構成に利用される変項や論理形式などは、「ないもの nothing」であり、在庫目録には掲載されないのである⁴⁶。ここで「在庫目録」という概念が利用されるのは、もちろん「目録」は名前のリストからなるからである。在庫目録を作るには、「以下の対象だけが実在する」として、まず

45) RSDP, p.23 (邦訳200-1頁)では、データとなる対象について、それが存在すると主張することは無意味であるとされているが、その直後の *ibid.*, p.24 (邦訳202頁)では、「それらはそこにある」と言われている。つまりこの論点の眼目は、各論理的原子はもちろん存在するのだが、それら一つ一つについて「存在する」と語りえないということにある。

46) PLA, p.206, 209 (邦訳115, 124頁)を参照。命題関数は、一般的事実を在庫目録に掲載するとき、目録に登場するとされる。しかし、命題関数を用いた分析が、一般的事実の構造としては最終的に満足すべきものではないと同時に主張されていることから、ラッセルは、命題関数は一般的事実の構成要素として実在するために目録に登場するとしているのではなく、むしろ一般的事実を記載するための表記方法の一部として登場するにすぎないと言いたいのだと思われる。

冒頭で一般的にその目録の内容を特徴づけておけば、あとは対象の名前（個物については論理的固有名、普遍に対しては単純な述語）をリストアップしておけばよいだけで、「これは存在する」などの存在文を掲載する必要がないため、無意味な命題を主張する必要がない。そのため、存在命題を用いることなく、在庫目録に登場する・しないにより、実在する論理的原子であるか、それとも構成される判断依存的な対象であるかを区別できるのである。

論理的原子などの実在する対象と、命題などの構成される対象の違いを「存在する・しない」の違いとすることができない第二の理由は、命題や命題関数のような判断依存的な対象についても「存在する」と主張できることである。先に述べたように、「存在は命題関数の性質である」という主張自体は、「命題関数が存在する」ことを述べるものではなく、命題関数を充足する対象が存在することを述べるものである。しかし関数変項を認めている『プリンキピア』の分岐タイプの体系では、命題関数もまた、より高いタイプ・オーダーの命題関数を充足することができるため、それにより、命題関数もまた存在すると主張しうることになる。命題もまたタイプとオーダーに階層化されつつ、命題関数を充足する対象となるため、命題についても同様に存在すると主張できる。さらに無クラス理論は、あたかもクラスが非述語的関数の代入項となるかのように読みうる表記法を採用しており、関数変項を通じてクラス変項を導入するものと見なすことができるため、その意味ではクラスもまた「存在する」と主張しうるものとなる[PLA, p.230 (邦訳 177 頁)]。それゆえ、命題や命題関数、そしてクラスなど、我々の判断に依存する対象もまた存在すると言ったことができるのであり、それらと個物や普遍などの論理的原子との存在性格の違いを、「存在する・しない」の違いとすることはできないのである。前段落で、その違いを特徴づけるために持ち出された「在庫目録」が、あくまで「実在の在庫目録」であって「存在するものの在庫目録」でないのもそのためである。

ただし、このように命題や命題関数、そしてクラスなどの存在を認めているからと言って、論理的原子論が『諸原理』のように膨大な存在論を抱え込むと解釈してはならない。これらの対象としてどのようなものが存在するかに関しては、分岐タイプ理論という構成主義的理論と、真理の対応説によって制約が掛けられているため、『諸原理』のように非可算無限個の命題を認めることにはならず、また（これは『諸原理』においても回避されていたが）「黄金の山」のような虚構の対象を認めることにもならない。

ある対象の存在は、ある命題関数を充足することを通じて語られるが、命題関数を充足する命題も命題関数も、そしてそれらによって充足される命題関数も、多項関係理論という構成主義的理論に従って形成される判断という心的事実から抽象されたものである。分岐タイプ理論という論理体系は、この判断の階層によって裏づけられた、抽象された対象間の関係にすぎない。それゆえ、適切な過程を経て形成された判断という一定の心的事実（これは、個物や普遍といった論理的原子と同様に実在する対象である）によって裏づけられた命題や命題関数のみが、なんらかの命題関数を充足しうるものであり、存在すると言えるのである。あるいは、逆に言えば、ある命題や命題関数が存在すると言えるのは、それらから出発し、多項関係理論の秩序を逆にたどることで、原子命題を内容とする判断にまで適切にその起源を遡ることができること、そのときのみであると言ってもよい。たとえばタイプやオーダーを特定しない〈xは命題である〉や〈xは命題関数である〉といった命題関数や、悪循環原理に違反する一般命題などは、実在する事実による裏づけを欠いているため存在するとは言えないのである。

クラスに関しては、以上のタイプ理論による制約に加え、真理の対応説による制約が課される。人間のクラスは、〈xは人間である〉という命題関数が充足する値を持つ以上、存在すると言える。しかし、一角獣のクラスは、〈xは一角獣である〉という命題関数が充足する値を持たないため、存在しない⁴⁷⁾。もちろん、〈xは一角獣である〉という命題関数は存在しうる。たとえばそれは、〈一本の角を持つ〉や〈たてがみを持つ〉などの普遍を要素とする判断を通じて、そこから抽象された対象として存在すると言えるだろう。さらにここから、〈唯一の一角獣〉のような記述や、〈すべての一角獣〉のようなクラス表示概念もまた、判断依存的な構成された対象として存在するとは言える。しかし命題や命題関数とクラスでは構成原理が異なる。〈xは一角獣である〉は、ただ分岐タイプ理論によって課される制約のみに従い、それがより高いタイプ・オーダーの命題関数を充足することによって存在すると言えるが、一角獣のクラスが存在するためには、〈xは一角獣である〉という命題関数がその意味で存在するだけでなく、さらにこの命題関数自身が充足する値を持たなければならない。さらに突き詰めて言えば、この命題関数が表示する、〈…は一角獣である〉という主

47) PLA, p.203, 218 (邦訳 109, 145 頁) を参照。

張部分を共通して持つ命題のうち、少なくとも一つは事実に対応し、真でなければならない。しかしそうした事実が存在しないため、一角獣そのものは存在しない。この命題関数（さらにここから構成しうる記述、クラス表示概念）が存在することからは、一角獣が存在することは出てこないのである。

興味深いことに、ラッセルは存在だけでなく、非存在に関しても注意深く用語を使い分けているように思われる。先に述べたように、命題や命題関数が判断依存的であるために、論理的原子や事実とは違って実在的ではないことを表現するために、ラッセルはそれらが「ないもの nothing」であるとは言⁴⁸⁾が、「存在しない not exist」とは言わない。それは、「存在 existence」の概念が命題関数の充足として定義され、命題や命題関数もまた何らかの命題関数を充足するためである。一方、最大の有理数や一角獣のように、いかなる命題関数も充足することのない、判断依存的なものとしてすら存在しないものについては、それらが「ないもの」であるとは言わずに「存在しない」という言い回しを用いるのである [ibid., p.217 (邦訳 142 頁)]。こうした用語の使い分けは、論理的原子とは違って実在はしないが、判断という心的事実や判断に対応する事実によって裏づけられた、適切に構成された対象として存在するものの非実在性と、虚構の対象の非実在性とをラッセルが意識的に区別していたことを示唆している。

このように、命題や命題関数、そしてクラスは、命題関数を充足するという意味では個物や普遍と同じく「存在する」と言っているのであるが、それらの存在に対しては厳しく制約が課せられる。命題や命題関数については分岐タイプ理論が、そしてクラスに関してはそれに加えて真理の対応説を通じた実在による構成主義的制約が課せられるため、この制約に違反するものはいかなる意味であれ存在しない。また分岐タイプ理論は論理的体系内部での理論であるが、しかし論理体系全体が多項関係理論に従って形成される信念から抽象されたものであり、論理体系の外から、すなわち形而上学的観点から見るときには、存在すると言っている命題や命題関数、クラスでさえ非実在的であり、「ないもの」

48) 命題は *ibid.* p.196, 200 (邦訳 92, 101 頁)、命題関数は *ibid.* p.202, 206 (邦訳 107, 115 頁)、変項と論理形式は *ibid.* p.209 (邦訳 124 頁) をそれぞれ参照。ラッセルの 'nothing' という語の用法については、これまでほとんど注意が向けられてこなかった。誤解の例として、たとえば Godwyn and Irvine (2003)、とくにその § III を参照。また Linsky (1999) は、'nothing' とは論理的原子以外のものことであるとしており、これは対象の分類としてはほぼ的を射ている（ただし、事実は論理的原子ではないが、実在物であって「ないもの」ではないとすべきである）が、なぜ論理的原子以外が 'nothing' として語られるかを説明していない。

であるとされるのである。

今後は、ラッセルのこの用語法を採用し、文や開放文、記述句やクラス名といった記号から、命題や命題関数、記述やクラス表示概念を区別するために、後者のような構成される対象の領域を「ないもの」と呼び、それらを意味するかに見える記号を「不完全記号」と呼び分けることにしたい。そして「ないもの」の内部で、クラスのように判断と事実との対応を構成のために必要とする対象を、特に「論理的虚構」と呼ぶことにする。我々は『知識の理論』における不完全記号の学説の到達点をまとめる際に、論理学は記号でも実在でもなく、その間の表示概念という本性を持つ存在者からなる秩序を取り扱うとしたが、この用語法に従えば、ラッセルにとって論理学は、記号でも実在でもなく「ないもの」の領域を取り扱う学問であると言えるだろう。

「記号」概念の多義性

注意点の第二は、ラッセル哲学における「記号」概念の多義性についてである。従来ラッセルに対しては、意味論と統語論の区別を判明につけていない、あるいは使用と言及を混同しているという批判がなされてきた⁴⁹⁾。たとえば、ラッセル哲学にとっての根本的概念である「命題」は、第一には文という記号の意味する複合物であるにもかかわらず、それ自身が記号であるかのように論じられている箇所が多数ある。また変項や命題関数など、現在ではもっぱら統語論的存在として扱われる概念も、ラッセルにおいては第一に記号の意味する存在（表示概念）であったが、しかしそれらも一種の記号として論じられる場合が多数ある⁵⁰⁾。他にも記述や論理形式など、ラッセルが論理学の主題とした諸

49) とりわけ、Ramsey (1925), pp.199-200 (邦訳 293-4 頁)、Quine (1963), p.245, 254 (邦訳 226, 234-5 頁)、Gödel (1944), pp.136-8 (邦訳 68-9 頁) では、分岐タイプ理論の採用が、記号であるべき命題関数とその意味とされる属性（普遍）の混同に基づくと解釈され、批判されている。また Chihara (1973), pp.24-8 は、タイプの区別を正当化する議論との関連から、使用と言及の混同について検討している。

50) たとえば変項について、PM, p.4 (邦訳 27 頁) では「意味が確定していない任意の記号を変項と呼ぶ」と言っておきながら、*ibid.* p.5 (邦訳 29 頁) では「変項は単一の文字で表示される」と、記号によって表現されるものとしている。命題関数については、たとえば RML の p.261 で「一つの表現」として定義しつつ、p.262 では「内包としての関係」は命題関数であるとしている。同じ論文の pp.263-5 では、言語とそれが名指すものとの区別の重要性をラッセル自ら強調しているにもかかわらず、である。また記述については、PM, p.30 (邦訳 106 頁) で、記述を「句 phrase」として定義しつつ、記述は「命題中である対象が位置する場所に構成要素として生じるように見える」とされ、文が表現する対象としての命題と同じ、表現によって意味される水準にあるものとされている。

対象に関して、このような「記号」と「記号が意味する対象」との区別を判明にせずに議論がなされている⁵¹⁾。さらには、これらの諸対象を統語論的な手続きによって消去する手続きを指す「不完全記号」という概念そのものすら、記号の意味する存在について言われている箇所がある。たとえば『プリンキピア』の序論の第3章では、クラスは（「論理的虚構」ではなく）、ほぼ一貫して「不完全記号」と呼ばれている。

ラッセルの論述にこうしたあいまいさがあることは否定できない。そしてラッセル哲学の正確な理解を拒み、不当な批判を招いた原因の一つが、ラッセル自身の論述の不正確さにあることも確かである。だが、不完全記号の学説がいかに形成されてきたかを見てきた我々は、ラッセルの論述のあいまいさには、意味論と統語論、使用と言及の混同のような単なる不注意には留まらない、より本質的な理由があったことを理解すべきであり、またそれが可能なはずである。

『諸原理』において、変項や命題関数という論理学上の根本概念は、表示の理論によって説明されていた。すなわち変項はすべての項のうちの任意の一つを表示する表示概念として、命題関数は変項以外の部分に関して共通する型（主張）を持つ任意の命題を表示する表示概念として、理解されていた。そして『諸原理』において表示概念は確定記述句や量化表現といった記号ではなく、それらの記号によって心理的に意味されると同時に、単一の項もしくはクラスといった実在する対象を論理的に意味する存在である。つまり、ラッセルの論理学的考察のそもそもの出発点において、「心理的意味」と「論理的意味」の二重の意味関係が認められており、また語や文といったいわば「心理的な記号」と、表示概念という「論理的記号」という二層の記号体系が念頭に置かれていたの

51) たとえばPLAの第1講義では、「純粋な論理学の命題を述べるときに使われる語は、実はすべて統語論に属するのです。統語論に属する語は形式あるいは相互の結びつきを表現するのみであり、それらが含まれる命題の特定の構成要素に言及することはまったくありません」とし、変項や論理形式を記号としてのみ認め、それらが意味する存在者を必要としないかのように論じた[PLA, p.165 (邦訳19頁)]。すぐ後で、「[哲学的論理学のようなきわめて抽象的な]研究の際に思考の主題になると思われているものは、とてつもなく難しく捉えどころがない……それについて考えようとするれば、必ず「六ヶ月に一回、せいぜい三十秒もそれについて考えられたらよい方だ」と悟られるほです。それ以外の期間に何をしているのかといえば、記号について考えているのです。記号は手で触れることができますから。それに対して、思考の主題とされているものは恐ろしいほどの難物で、それについて何とか考えようとしても、考えられるのはほとんど稀なのです」[ibid., p.166 (邦訳20-1頁)]と述べている。

である。そしてラッセルが論理学の考察対象としたのは、この二重の意味関係に挟まれた中間層である「論理的記号」としての表示概念と、その実在に対する論理的意味関係であった。心理的な記号である語や文、そしてその実在に対する「心理的」な意味関係は、主体による実在の認知という心的状態を前提する以上、客観的な実在のあり方を研究する「論理とは無関係」とまで言われている[PoM, §51]。

また、命題は『諸原理』においては実在そのものであり、自身以外の何かを論理的に意味するという機能を持つとはされていなかったが、多項関係理論と真理の対応説の採用を通じて事実から区別されることにより、命題もまたこうした「論理的記号」という役目を負うこととなる。つまり文という心理的記号によって心理的に意味されるものであり、実在の諸対象から構成された複合物でありながら、対応する事実を意味する記号的存在となるのである。さらに『知識の理論』では「論理形式」という変項からなる複合的な表示概念がさらに付け加えられ、それこそが論理学と哲学の考察の主題とされたのであった。こうして、心理的記号と実在の間に介在する論理的記号の領域が次第に膨らみを増していくのだが、ラッセルが一貫して論理学の考察の対象としたのは、この論理的記号からなる秩序なのである。

そして同時にラッセルが展開していた不完全記号の学説は、この論理的記号にまつわる困難（命題の統一性や「グレイの悲歌」の問題）を解消するために、それらを先述した「ないもの」として消去する手続きを与えようとする試みであった。不完全記号という概念は、単独では意味を持たず、一定の文脈あるいは使用においてのみ意味を持つ句 phrase と定義されているように、記号的な存在についての議論であるが、ラッセルにとって重要な「記号」は各種の表示概念や命題といった論理的記号であった。だとすれば、ラッセルが「不完全記号」の学説を通じて考察しているのは、第一義的には、記述句やクラス名といった心理的記号ではなく、論理的記号である表示概念や命題だったと考えるべきである。だからこそ『プリンキピア』でも「記述」として、記述句ではなく表示概念が言及されるのであり、また『論理的原子論の哲学』において論理学の用語は統語論に属するとされると同時に、手で触れることのできる心理的記号に比べて「とてつもなく難しく捉えどころがない」ものとされるのである。このように、自身以外の何かを指す記号として機能する存在が二重になっているだけでなく、普通に記号として念頭に置かれる語や文ではなく、それらが意味するもう一つ

の記号にこそ考察の焦点が当てられていること、これがラッセルの論述のあいまいさの原因の一つになる。

加えて、不完全記号の学説の内容自体が、さらに事態を複雑にする。『諸原理』においては語や文といった心理的記号とそれによる心理的意味関係は「論理に無関係」として考慮の対象外とすることができ、表示概念や項、命題といった、心理的記号によって意味される実在物に論述を集中することができていた。しかし、それらを「ないもの」という非実在物とすることを目指す不完全記号の学説は、心理的記号や心理的意味関係を、論理的記号の生成に決定的に重要な役割を果たすものとして論理的考察の中に織り込むものであり、二重の意味関係の両方を議論の対象とすることを要求する。たとえば表示概念としての記述は命題に構成要素として含まれ、ある対象を意味する論理的記号であるかのように見えるが、それは記述句という心理的記号が存在し、それを含む文全体が有意味であることに基づいている。あるいは命題が存在しそれに対応する事実を意味するように見えるが、それは主体が自身の判断を文を用いて表明することに基づいている。我々は先に、不完全記号の学説は命題や表示概念などの構成原理でもあるとしたが、構成される論理的記号と、それによる論理的意味作用が成立するには、語や文といった心理的記号の存在と主体によるその使用が前提となるのである。それゆえ、不完全記号の学説を展開している時期のラッセルは、二重の記号体系と意味作用の双方に言及しなければならず、これが彼の論述のあいまいさの根本的な原因となっているのである。

ラッセルのテキストを解釈するときには、ラッセルがこの二重の記号体系のどちらを念頭に置いて論じているのかをつねに注意しなければならない。そして彼の哲学を論じ、さらにそれを援用して自前の考察を展開しようとするとき、我々がこの二重の記号体系を混同してはならない。私は前節で「不完全記号」と「ないもの」という用語を使い分けることを提案したが、それはこの記号体系の混同を避けることを意図してのことである。

実在物としての普遍と「ないもの」としての命題関数

これまで我々は語や文などの記号と、個物や普遍からなる実在との間に介在する「ないもの」の領域の存在を指摘し、「ないもの」という論理的記号と語や文といった心理的記号を区別すべきとした。だが、「ないもの」の中には、心理的記号とではなく、実在する対象と混同されがちなものがある。すなわち、

命題関数と普遍の区別である。第1章でも注意したように、ラッセルにとって是一種の個体である普遍とそれを代入項とする命題関数は区別されるべきものだが、最近までこの区別はほとんど認識されず、多くの優れた解釈者ですら両者を混同したまま論じている⁵²⁾。また『プリンキピア』の実在論的傾向と構成主義的傾向がどう両立するのか、あるいは命題と命題関数の依存関係に関する循環などが、ラッセル解釈上の大きな問題とされることがあるが、これも命題関数と普遍の混同に基づくものにすぎず、ラッセルの体系は実際にはそうした問題を抱えていない。

第1章で見たように、『諸原理』においては普遍は「概念」と呼ばれていたが、概念は項の一種であり、そして項は「個体 individual」の同義語であるとされていた。つまり他の存在に依存せず、自立的で確定的な単一性を持つ対象である。一方命題関数は、それ自身一つの項である命題から、その任意の論理的主語を変項に置き換えることによって形成されるものであり、そのため不確定性を持つ。さらにクラス概念自身は単なる項であるが、命題関数は変項という表示概念を要素とすることにより、他の項に対して表示という論理の意味関係を持つ存在である。つまり『諸原理』の論理体系では、確定的であるか、それとも不確定性を持つかにより個体(項)と関数的存在が区別され、普遍は命題や個物とともに個体の側に属するのに対し、命題関数は不確定な関数的存在とされるのであった⁵³⁾。

分岐タイプ理論と多項関係理論という二つの不完全記号の学説を手に入れた後でも、普遍と命題関数の区別は維持されている。たとえば『プリンキピア』でも、命題関数は変項を含むがゆえに不確定性を持つ対象とされている点で、

52) たとえば Hylton (1980), p.93 を参照。この区別に注意を向けさせた最大の功労者というべきは Landini (1998) であるが、彼は逆に実在におけるタイプの区別を完全に否定するために、命題関数を開放文と見なす(関数変項は関式文字であると解釈される)など [ibid., p.277]、逆の方向に行きすぎており、この点に関しては Linsky (1999) による批判は正当であると思われる。一方で、リンスキーは『知識の理論』以前にも個物と普遍がタイプの的に区別されるとしているが [ibid., p.33]、これは受け入れがたい。『プリンキピア』ではランディニの言うとおり、個物と普遍はともに論理的には個体であり同一タイプに属するとすべきであり、論理形式の導入に際して実在にタイプの区別が認められたとすべきである。実際、リンスキーが実在にもタイプの区別が存在する文献上の証拠として挙げることができているのは、いずれも『知識の理論』以降の著作からである。

53) PoM, §28 では、「R を一つの関係とすると、 xRy によって……命題関数を表現できる」とし、関係と命題関数を区別したうえで命題関数を規定している。また ibid., §499 では、述語 predicates や動詞 verbs について、それらが個体 individual であると明言されている。

『諸原理』と変わらない。一方、個体変項の値となる個体については、「個体は、それ自身として存在するものとして説明できる」[PM, p.162]とされているが、1912年の『哲学入門』や1913年の「個物と普遍の関係について」において明らかなように、『プリンキピア』以降もラッセルは普遍を確定的な自立的存在としていることから、普遍もまた個体変項の値となるべきものである⁵⁴。『プリンキピア』では個体変項の他に、関数変項や関係変項も導入されるが、前者は命題関数を、後者はクラスと同様に論理的虚構である外延としての関係を値とするものである。したがって、この時点でタイプ分けは、命題、命題関数、クラス、外延としての関係といった、多項関係理論と無クラス理論を通じて構成される「ないもの」の領域においてのみなされるのであり、実在の対象は『諸原理』と同様にすべて個体変項に属するとされるのである。それによりラッセルは分岐タイプ理論を採用しつつ論理の普遍性のテーゼを保持することができたのであった。

その後、『知識の理論』において導入された論理形式の内部で、個物を値とする変項と関係を値とする変項が区別されることにより、無制限変項の原理が放棄され、実在する対象間にタイプの区別が持ち込まれた。そして論理形式の消去を目指した「論理的原子論の哲学」においてもその方針は踏襲され、普遍は本質的に述語的であるとされた。こうした見解の変化により、普遍と命題関数を区別する必要性はなくなると思われるかもしれない。しかしラッセル自身は個物と普遍をタイプの的に区別した後も、普遍と命題関数を区別している。たとえば「論理的原子論の哲学」では、普遍が論理的原子の一つであり「世界に存在するものの目録」に記載されるべきものであるとしているのに対し、命題関数は「ないもの」であり、一般的事実の分析に命題関数が用いられることからそれを「目録」に記載せねばならなくなることを困難の一つに数えている⁵⁵。

あるいは、ラッセル自身の見解はどうあれ、我々は不完全記号の学説の徹底化として、普遍を不飽和な存在とすることにより変項と論理形式を消去したので、普遍そのものが代入されるべき個物から命題への関数としての存在性格を

54) RUP, p.169で、ラッセルは「個物」と「普遍」のカテゴリー分けが『諸原理』における「物」と「概念」の区別を命名し直したものであるとしており、タイプ理論の導入以前・以後を通じて、タイプの区別が適用されない実在におけるカテゴリー区分が一貫していることは明らかであると思われる。

55) 本章の註46を参照。

帯びることになり、普遍と命題関数を区別する必要はなくなると思われるかもしれない。しかし我々の立場においても、普遍と命題関数の区別をつけることは重要である。

両者の違いは、判断を通じて形成される対象である命題との依存関係に関して明瞭に現れる。確かに我々は普遍を自立的な対象ではなく、個物と結合し事実を構成することをその本質的特徴とした。その限りでは、普遍は複合物の要素となることなくして実在するわけではない。しかしここで必要とされるのはあくまで、我々によるその認知とは独立に実在において成立している事実であり、我々が判断を通じて構成する命題ではない。「論理的原子論の哲学」において普遍の理解は「命題の形式を巻き込まざるをえない」とされていたが、それは我々が命題の理解という認知的形式を通じて事実を知るからであり、普遍そのものが命題に依存するからではない。逆に、命題こそその構成要素である普遍の存在を前提するのである。

一方、命題関数は判断によって構成された命題に依存する存在である。こうした依存性を示す論点として、すでに『諸原理』において次のような議論がなされている。たとえば〈xが人間であるならば、xは死すべきものである〉のような命題関数を、ラッセルは、〈xは人間である〉と〈xは死すべきものである〉という二つの命題関数から構成されたものとするのではなく、単一の命題関数とすべきであると主張する[PoM, §42]。その理由は、命題関数が不確定なものである以上〈xは人間である〉と〈yは人間である〉とは区別されないため、もしそれを〈xは人間である〉と〈xは死すべきものである〉からなる複合的な命題関数とするならば、〈xは人間である〉と〈yは死すべきものである〉からなる複合的な命題関数、すなわち〈xは人間であるならば、yは死すべきものである〉との違いがつけられなくなる、というものである。〈xは人間であるならば、xは死すべきものである〉が〈ソクラテスは人間であるならば、ソクラテスは死すべきものである〉や〈プラトンは人間であるならば、プラトンは死すべきものである〉をその値とする命題関数であるのに対し、〈xは人間であるならば、yは死すべきものである〉は、〈ソクラテスは人間であるならば、プラトンは死すべきものである〉や〈プラトンは人間であるならば、アリストテレスは死すべきものである〉を値とする命題関数であり、両者ははっきりと区別されるべきである。この区別をつけるためには、〈xは人間であるならば、xは死すべきものである〉は、たとえば〈ソクラテスは人間であるならば、ソクラテスは死

すべきものである」という複合的な命題から、同じ〈ソクラテス〉という個体を変項〈x〉で置き換えるという一度の操作によって構成された単一の命題関数であり、対して〈xは人間であるならば、yは死すべきものである〉は、たとえば〈ソクラテスは人間であるならば、プラトンは死すべきものである〉の〈ソクラテス〉を〈x〉で、〈プラトン〉を〈y〉で置き換えるという二度の操作によって構成された、これも単一の命題関数であるとしなければならない。これらの命題関数が構成要素としている普遍は、〈…は人間である〉と〈…は死すべきものである〉であり、違いはない。しかし命題関数の同一性はその構成要素の同一性のみによっては決定されず、それがいかなる命題から形成されたかという形成史が重要になるのである。

あるいは、命題をその構成要素へと分析する仕方と、命題関数と代入項へと分析するやり方にも違いがある。〈aRb〉という命題を、その構成要素である個物と普遍に分析する方法としては〈…R…〉という普遍と〈a〉と〈b〉という個物が結合したものとするやり方しかない。しかしこの命題から、命題関数とその代入項に分析するやり方としては、〈xRy〉という命題関数に〈a〉と〈b〉が代入されたものとする以外に、〈xRb〉という命題関数と〈a〉という代入項、あるいは〈arb〉(rは関係を値とする変項とする)と〈…R…〉という代入項とするケースなど、複数の分析が可能である⁵⁶⁾。またこの後者の例の場合、命題関数は一切普遍を構成要素としていないことにも注意しなければならない。この命題関数はaとbの間に成立しうる任意の関係についてのものであり、それゆえこれを用いることにより普遍性を持つ主張が可能になるが、しかしその本性として普遍を備えてはいないのである⁵⁷⁾。

これまで指摘してきた普遍と命題関数の違いは、存在性格あるいはその論理的地位に関する違いである。ここからは必ずしも、その違いに応じて、それらについての我々の認識の仕方も異なることにはならない。面識による普遍の認識を、事実または命題という複合物における反復可能な側面の識別だとしたが、

56) これは第1章で指摘した、命題を構成する項へ分析することと、論理的主語とそれについての主張に分析することの違いと関連する。1.3, 33頁を参照のこと。

57) ラッセルはARでの質疑応答の際に受けた、個物と普遍の区別に対する異議に、「ソクラテスは人間である」を、「xはソクラテスであるは(xのすべての値に対して)、xは人間であるを合意する」として解釈すべき場合があることは認めましょう。そしてその限りで、ソクラテスは一つの普遍なのです。しかしこのようなことには、命題関数という形式が、求められている条件を十分に満たしています」[AR, p.144]と答えている。

同様の規定は命題関数の理解に対しても与えることができる。たとえば〈xは人間であるならば、xは死すべきものである〉という単一の命題関数は、〈ソクラテスが人間であるならば、ソクラテスは死すべきものである〉という命題における、〈プラトンが人間であるならば、プラトンは死すべきものである〉や〈アリストテレスが人間であるならば、アリストテレスは死すべきものである〉などの命題によって反復される側面として識別されることにより、理解されるところとすべきであろう。

だとすれば、認識の仕方としては普遍と命題関数に違いはなく、それゆえ我々が、自分がどのような仕方で識別能力を発揮しているかを反省したとしても、そのとき認識しているのが普遍なのか命題関数なのかを区別することができないことになる。それを区別するためには、認識の対象が、単純な対象として実在しているか、それとも論理的操作上では単一の存在とされているが、実は複数の要素からなる複合性を持つ対象であるかという、対象の論理構造の違いを見てとらなければならないのである。

ここで不完全記号の学説の認識論的役割として指摘した、記述が判断によって構成された非実在的な対象でありながらも、推論実践においては一つの存在者として扱うことができ、そのように扱うことが非常に有用であるという論点、そして記述が単純な記号によって表現されることにより、実際に固有名が指示する単一の実在物であるように思われるという論点が、「ないもの」一般に当てはまるとし、命題関数に適用してみよう。すると、命題関数と普遍の論理構造の違いが、記号の単純さと推論実践の有用性のために覆い隠され、「ないもの」である命題関数を実在する普遍だと誤解する可能性があることになる。つまり、我々は事実を知覚したり命題を理解する際に、その反復可能な単一の特徴を特定し、それが実在する普遍であると見なすが、じつはその単一性は我々の識別能力の限界のために成り立っているにすぎず、実際は同じ個物に担われる複数の普遍からなる特徴である、ということがありうる。

ラッセルにとって哲学、あるいは形而上学は、実在の一般的構造と、そして実際にいかなる対象が実在するかを特定し、実在のあり方を正しく記述することを目指す探求であった。だとすれば、我々は自分の認識を内省するだけでは区別できない普遍と命題関数を区別し、反復可能な特徴のうちのどれが実在するか、あるいはどのような普遍が実在するかを突き止めることが、哲学の一つの課題となると言えるだろう。ラッセルがこの課題をどのようにして遂行して

いるかは、第Ⅱ部の考察の主題である。

命題関数と普遍を区別することの重要な帰結

普遍と命題関数を区別することからは、「プリンキピア」解釈に関わる一つの重要な論点を引き出すことができる。それは、ラムジー、クワイン、ゲーデルによる「プリンキピア」の批判⁵⁸⁾には一つの誤解が含まれていることである。

彼らは、ラッセルが性質 property という内包的対象に対する強い実在論的立場に立ち、性質が我々の認識や記号操作とは独立に存在すると考えていると解釈している。一方、量化は我々が推論実践において行う操作である。それゆえ、量化という操作も、それが適用される命題関数も、我々が推論する際に操作する対象であるとするべきであり、その操作によって認識独立的な対象が構成されるなどと考えるべきではない、と批判者たちは主張する。しかるにラッセルは、命題関数に対し、いかなる種類の対象を値として取るかというタイプの区別だけでなく、いかなる対象への量化を含むかというオーダーの区別も設けた。そして同じタイプの対象、たとえば同じタイプの命題関数であるとしても、それがいかなるタイプの対象に対する量化を含んでいるかによって、一つ上のタイプの関数変項の代入項となりえない場合が生じるとする。存在を命題関数の性質とし、変項の値となることが対象の存在を認めることだとするならば、命題関数が関数変項の値となるとき、ラッセルは開放文ではなく、それが意味する性質について議論しているはずである。しかし、それが量化という操作を含むという基準によって区別されるとすることは、推論の際に我々が行う操作に、性質を依存させることである。つまりオーダーの区別を設けるときには、ラッセルは性質に対して、「適切な量化という手続きにより構成されたものだけが存在する」とする、構成主義的な立場⁵⁹⁾に立っている。だとすれば、分岐タイプ理論を採用している「プリンキピア」においては、性質についての実在論と構成主義が併存していることになるが、この二つの相反する立場がいかにして一つの体系において共存しうるのか、理解しがたいと言わざるをえない⁶⁰⁾。

58) 本章の註49を参照。

59) 「構成主義」をこのように規定し、PMの分岐タイプ理論を構成主義的体系として解釈し評価するのは、Chihara (1973)である。とくにそのch.1を参照。

60) クワインやゲーデルの批判に対し、構成主義としてのラッセルの理論を擁護しているチハラ

なぜラッセルは、このように形而上学的に混乱した体系を展開することになってしまったのだろうか。その原因は記号の使用と言及の混同にある、というのが批判者に共通の診断である。ラッセルは「命題関数」だけでなく、「述語」、「性質」、「質」などの語をほとんど区別することなく、しかもそれを開放文とその意味である性質の双方に適用可能な表現として用いている。その結果、開放文という記号に対する操作である量化についての議論と、開放文の意味である性質に関する議論を区別できなくなり、本来は記号である開放文に対する操作である量化によって、記号の意味である性質の間にオーダーの違いが生じると考えてしまったのである。

批判者たちによれば、記号とその意味、開放文と性質をはっきりと区別し、性質に対する実在論を採るならば、オーダーを区別する必要がなくなる。たとえばあるタイプの命題関数が、同じタイプの命題関数の総体への量化を含む形で表現されていたとしても、そのタイプの命題関数を、量化の対象となる低いオーダーの命題関数と、それらへの量化を含む高いオーダーの命題関数に分ける必要はない。性質について実在論を採るならば、これはあるタイプの性質を同じタイプの性質に言及して特定すること、言い換えればその性質の名前を同じタイプのすべての性質に言及して作っているだけで、性質を構成しているわけではないからである。それはちょうどある学生を、「この教室の中で一番背が高い学生」として特定するのと同じことである。オーダーの区別がなくなれば、還元公理という疑わしい公理も必要なくなり、単純なタイプの階層のみを持つ体系を作ることができる。

以上の批判は、論理に関わるのが、記号とそれが意味する実在という二層の秩序であるとしている点で、ラッセルとは根本的に異なる見解を前提している。これまで見てきたように、ラッセルは心理的記号と論理的記号、すなわち文や音声などの表現とそれらが意味する「ないもの」という、二つの記号のレベルを区別していた。論理的記号が論理的に意味する(表示する)実在も合わせるなら、「記号-ないもの-実在」という三つの秩序が論理学に関わるのである。ラッセルが性質を認識独立的であるとするとき、論じられているのは実在に属する普遍としての性質や関係である。一方、タイプとオーダーが区別される命題関数は、心理的記号でも実在でもなく、論理的記号である「ないもの」である。

も、ラッセルにおける命題関数の位置づけに苦慮している。ibid., pp.29-31を参照。

そして多項関係理論が描出するように、この「ないもの」の秩序は我々の判断によって形成されるのであり、この秩序に属する命題関数に関しては、ラッセルは構成主義の立場に立つのである。ラッセルの形而上学がきわめて強力な実在論である一方、『プリンキピア』の体系は構成主義であるが、一つの体系、一つの存在者に対し実在論であると同時に構成主義的態度をとるような形而上学的混乱はここにはない。ラッセルが「命題関数」や「述語」や「性質」といった語を無差別に使用し、それゆえ使用と言及を混同しているかのような主張が随所でなされていることは事実である。それゆえ批判者たちがしたような誤解の根本原因が、ラッセル自身にあることは否定できない。しかし分岐タイプ理論を採用する『プリンキピア』の体系は、決して使用と言及の混同に基づくものではなく、『諸原理』以来ラッセルが取り組んできた問題に対する、筋の通った一つの結論として位置づけられるべきものなのである。

まとめ

本章では、『諸原理』の項の存在論が抱えていた、表示概念、クラス、命題に関する問題を、不完全記号の学説が解決することを論じた。ラッセル自身が発案した記述理論、分岐タイプ理論と無クラス理論、そして多項関係理論は、記述が意味する表示概念の問題、クラスと命題関数に関するパラドクス、そして偽の命題の問題を解決する。しかし、変項と命題関数という表示概念の問題と、命題の統一性の問題は未解決のまま残され、さらに多項関係理論が要請する論理形式という対象が問題を深刻化した。そこで我々は、「普遍は述語的本性を持つ」という「論理的原子論の哲学」でのラッセルの示唆に従い、普遍が事実または命題という複合物という脈絡から独立ではなく、変項記号が表しているのは判断形成の際に発揮される能力であるとした。これにより、命題の統一性の問題を解決し、また変項を不完全記号として扱うことで、表示概念に関する問題も解決することができる。

従来、ラッセルの論理体系は、記号・表現の秩序と、それが意味する実在する諸対象からなる秩序の二層の関係を論じるものだと考えられてきた。そして記述理論や無クラス理論は、記述句や量化表現の分析を与えることによって、誤って単純な事物として実在すると考えられている対象を、センスデータなどの真に単純な対象へと還元するものであると解釈されてきた。本章ではこうした解釈に換え、不完全記号の学説を、実在する単純な対象から判断依存的な対

象である「ないもの」を構成する役割を果たすものとして解釈した。そして、ラッセルの論理学は、記号・表現でもなければ実在そのものでもない、それらの間に介在する「ないもの」の秩序を扱うとした。